
マヨイマヨイガ

うりぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マヨイマヨイガ

【Nコード】

N6794Z

【作者名】

うりぼう

【あらすじ】

名家東雲の長女、遊子は見鬼の才を持っていた。

その特殊な才能と血筋から、生まれてからずっと監視されるように生きてきた。

進学を転機に親元を離れ、寮生活をするようになったのだが、そこにいたのは「迷ひ神」と呼ばれる化けものたちと、五年前ぶりに再会した幼馴染だった。

一 東雲遊子

六月の半ば、湿った空気が頬を撫でる。

入学から二か月がたった現在でも、遊子^{ゆす}は教室に溶け込めずにいるた。

クラスの半分は中部からのエスカレーター組、残りの多くはスポーツ特待生が占める中で遊子は残り少なき一般入試組であった。元々、深い対人関係を作りづらい性格も相まってか、休み時間は次の授業の予習か、風に揺れる木々を眺めるだけで終わった。

一見、寂しげな光景であるが、遊子はそれを気にしておらず、ゆえにそれが今の状況を増長させているのであった。幾度か彼女を昼食に誘うクラスメイトもいたが、どこか浮世離れた彼女が年相応の話題についていけるわけもなく、みな自然に離れていった。

つやつやとした黒髪をボブに切りそろえ、アイラインの必要のない切れ長の目は、ブレザーよりもセーラー服のほうが似合いそうな、悪く言えば時代錯誤の少女、それが東雲遊子^{しのめゆす}であった。

遊子は四限目の授業が終わると、忙しく学食へ走っていく生徒たちを後目に中庭へと向かった。巨大な鳥かこのような建造物の中に入る。元々は温室として全面ガラス張りだったそれは、今はただの骨組みだけとなっている。

中心の大きな木の下のベンチに座る。持ってきた布包みを開け、小さな弁当箱を取り出した。中には五穀米のおにぎりがぎっしり詰まっている。おかずは中の具として詰まっているはずだ。寮の食堂で頼めば作ってくれる昼食だった。

革ベルトのアンティークな腕時計を見る。時間は十二時半になるうとしている。

制服のポケットから携帯電話をとると、着信が鳴った。

「はい、遊子です」

表示画面を見なくてもわかる相手は聞きなれた低い声だった。

「中間テストの結果は戻り次第報告しますので。はい、食事はちゃんととっております」

毎日、変わらぬことを聞く祖父を遊子はいつもどおり模範的に答える。

「わかりました。東雲の名に恥じぬよう勉学に励みます」

五分足らずの間に一日の報告を終えると大きく息を吐いた。相変わらず身内とも思えない堅苦しい言葉づかいだった。

「……おじい様は心配性だ、仕事中だろうに」

携帯をポケットに押し込み、おにぎりを一口で飲み込んだ。喉に詰まりそうになり、パックのオレンジジュースを飲み干した。

五限目は体育だった。

（スポーツ特待生制度って意味があるのだろうか？）

他の学校はともかく、この学園ではそれは意味をなしていない気がする。遊子の率直な感想だった。

エスカレーター式の名門校である東都学園は、その生徒の多くは良家の子女である。偏差値は高いので、スポーツ特待という言葉を使い、成績の満たない生徒を無理やり入学枠にねじ込んでいるのではないのかと思う。というか、絶対そうである。

女子はソフトボールだったが、やる気のないピッチャーの玉は当てるだけで二塁に行けた。わざと遅くしているのだろうが、型の崩れからまともな実力はないように思える。ソフト部だからとピッチャーにさせられたことを面倒にさえ思っているようだった。

男子はサッカーをしている。休み時間の延長としかいえないだらけぶりで、体育教師も教育実習生にまかせていた。

（無駄に広いグラウンドだ）

金持ち学校であることも理由であるが、隣に大学部があり、合同練習が行えるように作られている。幼、初等部は市街地に近い場所にあるが、中等部以上は郊外に併設され、学校だけで一つの街のように作られていた。

ゆえに、中等部以上はほとんど寮生活で、でなければ近くの賃貸マンションに住んでいることがほとんどだ。遊子もいくつかある寮の一つに住んでいる。

（今日の夕飯はなんだろう？）

魚が食べたいなあと思いながら、ホームを回った。

遊子の部屋は十畳一間、トイレ、シャワーがついている。一人部屋というだけで学生寮としては贅沢すぎるが、遊子も含めて部屋が広いと思う者は少ない。洗濯も掃除もハウスキーパーがやってくれる、それが当たり前の学生が住んでいるのだ。

備え付けのベッドと本棚、机とクローゼットの他には不釣り合いなほど大きいテレビがある。いらないうつたのに何も無いのは寂しいからと両親が送りつけてきたが活用したことはない。

「いっそ、ラウンジに置いたほうがいいか」

ラウンジのテレビと同じサイズである。各々の部屋には、専用のテレビを持っているものがほとんどであるが、スポーツ観戦なりドラマなり、皆で見る機会も多いようだ。

六時半から学食が開く。遊子はブレザーからブラウスとスカートに着替える。制服よりも地味な私服、一番動きやすいという理由で着ているのだが、無口で人付き合いの良くない性格もあいまって学

校でも寮でも地味というステータスになっている。

遊子は学生証の入ったカードケースを持つと、部屋を後にした。

学園の十五ある寮のうち八つは女子寮である。遊子の住む弥生寮には、中部や大学部も含めて二百人ほど住んでいる。規模と部屋の造りからして、一般的な学生寮とは程遠い。共用スペースにはグランドピアノ完備の防音室や遊戯室、図書室も設置されている。寮費も一般のものと比べ、桁が一つ違う。

寮の食堂はすでに列をなしていた。制服やジャージ、トレーナーを着た女生徒ばかりで遊子のような恰好をしているほうが珍しかった。いいところのお嬢様が多いのだが、自然とこういう場では動きやすさ、気軽さのほうに上にくるらしい。

メニューは前もって伝えておけばある程度好きなものを作ってくれる。アツアツのご飯と焼き魚、味噌汁、おしんこに和え物を受け取る。一見地味な組み合わせだが、盛られた器は瀬戸物であり、プラスチックという無粋な食器は学食といえありえなかった。

空いている隅の席を陣取ると、手のひらを合わせた。

「いただきます」

脂ののった魚に大根おろし、柚子を絞り醤油をかける。ほくほくとしたごはんとともに口に頬張ると得も言われぬ幸せな気分になる。

魚が標本のような骨になり、味噌汁を飲み干して席を立とうとする、

「こんばんは、東雲ちゃん」

ピンク色の派手なジャージを着た女生徒が目の前に座った。茶色というより金に近い髪と、あけたばかりのピアス穴が目立つ少女はクラスメイトの沢渡だった。

「はは、みんなまだ部活から帰ってきてないのよ。やんなっちゃう」

弥生寮では遊子と沢渡のほかに三人同じクラスのものがいる。沢渡は特待生だが、他の三人はエスカレーター組だった。遊子ほどではないが、沢渡もそういう意味であぶれているのだろう。

遊子は早く部屋に戻りたいと思いながら、一方的にしゃべり続ける沢渡に気のない返事をする羽目になった。まあ、その気になれば無視すればよかったわけであるが。人嫌いというわけではなかった。

一人で食事をするのに抵抗がある、そんな人種だから仕方がない。

寛容な気持ちで相槌を打っていた。

沢渡は食べるのが遅く、カルボナーラ一皿を四十分かけて食べた。

おかげで遊子が部屋に戻れたのは八時前だ。

浴場は混んでいるので入るのをあきらめた。備え付けの風呂は、西洋式のバスタブでひのき風呂に慣れた遊子には大きなたらいにしか思えないので、シャワーで済ませる。

タオルで髪を拭きながら、枕元の目覚まし時計を見ると、ポケットから携帯電話を取り出す。

携帯電話が震える。

「はい、遊子です」

昼間と同じ対応だが、今度の相手は女性の声である。母親であることは、出る前からわかっていた。

「今は寮の私室です。えっ？服ですか？十分です。入学前に買いに行っただじゃないですか」

クローゼットの中には、まだ、袖を通したことのないワンピースやチュニックが詰まっていた。どれもブランドものであるが、どうにも趣味が合わない。フリルやリボンが市松人形に似合わないように、自分にも似合わないことがよくわかっていた。

「おじい様の様子はとうですか。……、そうですね」

部屋のカーテンを開ける。梅雨らしい湿ったにおいがする。

「わかりました。テスト結果は郵送で送りますので。父様によろしくお伝えください」

あちらの電話が切れたことを確認すると、遊子は壁に頭を突っ伏した。

「GPS機能付き」

遊子はふらふらとベッドに倒れこんだ。

親元を離れても、彼女の束縛は変わりなかった。仕方ないことだとわかつている。

「以前よりもずっとましだから」

そう言い聞かせた。

一時限目は数学だった。ホームルームの三十分前から教室にいるものは、大体、その予習が出されていた課題を写しているかどちらかである。

中学時代は毎朝一時間半かけて学校に通っていた遊子にとっては、することがないからという理由で教室に来ていた。暇つぶしに参考書の練習問題を解いていると、必ず現れる人間がいる。

「東雲さん、もしかして課題終わってる？」

妙に甘えた声をした女生徒だ。名前は覚えていないが、たしか沢渡とよく話しているので特待組だろう。

「うん」

と、いうとノートを渡した。クラスメイトというのは面倒くさいもので、下手に断ると後々面倒になるのを女子校時代に学んでいた。ゆえに穏便な方法をとる。利害が一方的なものであれ、遊子にとって損がなければ問題ないのだ。

「ホームルーム前には返してね」

「わかったわかった、ありがとー」

女生徒は自分の席でノートを広げると、周りにわらわらと他の生徒が集まってきていた。

（せめてクラス分けは成績別にしてもらいたい）

それは別に相手を馬鹿にした意見ではなく、特待組まで一般組と同じスピードで勉強せねばならないのは双方にとって不具合が生じるというものである。東都学園は進学校という形をとっているので、学習は上のレベルに合わせる方式である。あぶれたものは、朝なり放課後なり課外授業に参加せねばならない。

二学年からクラス分けは理系、文系に分かれ、それぞれ特別進学クラスが設けられる。遊子はとりあえず理系の特進クラスに進むことを考えている。特進クラスは学年の一割程度しか入れず、一般入試組でもあぶれるものがあるのだ。

一般組にとってそれは死活問題になる。いうまでもなく、エスカレーター組、特待組は家柄のよい、または有力者の子女が多い。成績という己の実力だけで入る一般組は、それだけで肩身の狭い思いをしている。特進クラスを逃せば、学園カーストの底辺のさらに下

に位置することになるからだ。

遊子にノートを借りに来た生徒たちを例にとればわかる。遊子が一般入試組だと知って断れないと思っっている点である。要は自分よりも低い地位にいる人間であると高を括っている。遊子の場合、地味な外見がそれを助長させているのだろう。

選民意識は、今まで小山の大将だった特待組に多い。

残念なことにそれはお門違いで、遊子もそれなりの名家出身である。この学園に入る実力があっただけにすぎない。ある事情のため、急遽一般入試にて入学したに過ぎない。

（別に害があるわけでもなし）

なにかしら我慢ができないことにならないかぎり、家の力を借りることはしたくない。

それでも、『東雲』という姓を聞いて、わかるものはわかっていのだろう。遊子を見下しているのはクラスのほんの数名に過ぎない。

ゆえにくだらなことで優越感を抱いているのは、そんな教育も行き届いていない成り上がりということになる。

（将来困るのは自分だというのに）

学園に入る前はきつとちやほやされて暮らしていたのだろう。しかし、東都学園は以前ほど自分の地位が高くないことを知って焦っているのかもしれない。

くだらないランク付けをするのは人間の本性だとわかっているが、それを隠すくらいの器量はあるべきである。

（みんな引いてるからな）

遊子は先ほどノートを持っていったグループを見た。その中に、沢渡もいる。

なにやら剣呑な雰囲気が立ち込めていた。

「なんで、これじゃないって言ったじゃない？」

「えっ、でも、昨日はこれだって、マユちゃんが」

沢渡はおろおろしながらマユと呼ばれた少女に言った。

「気が変わったの？そんなくらいもわかんないの？ありえないわ。私がいったのはラメなしのほう」

女生徒は沢渡の持ってきた包装を投げる。がちゃんと音がして中から小瓶が出る。淡いピンクのラメ入りグロスだ。

「いや、言われてないし」

「なによ、それって私が悪いわけ？」

「えっ、でも」

「それに、軽々しくマユちゃんとか言わないでくれる。友達でもないのに」

沢渡は泣きそうな顔でマユ周りにいる女生徒たちはくすくすと笑っている。

（周りが冷たい眼で見てるのは、本人たちは気が付かないと）

完全にいじめである。正直いじめの中では創意工夫のないものといえる。もっと陰険なものを目にしてきた遊子であるがやはり気持ちのいいものではない。まだ、救いなのはクラスメイトの多くがそれを好奇ではなく戸惑いの目で見ており、どのように反応してればよいのかわからないことである。

いい意味でも悪い意味でも純粹培養が多いらしい。

沢渡は特待組であるが、特待組の中でも彼女らなりにランク付けがあるのだろつ。

（仕方がない）

遊子は席を立つと、沢渡たちの前にいった。

「ん？なんか用？東雲さん」

不機嫌な声で日本人形のような少女にいった。

「ノート終わったなら、返してほしいのだけど、ホームルーム始まるし」

抑揚もなく、遊子は要件を伝えた。

「えっ、でもまだ写し終えてないし」

「じゃあ、私は一時限目の授業、ノートなしでやればいいの？」

暗いとか、地味だとか、おとなしいとかそのような形容詞でくっついていたクラスメイトにそのように言われるとは思っていなかった

らしい。間抜けに口を開けている。

「じゃあ、返してもらってから」

遊子はノートを取ると、自分の席に戻った。

後ろからなにか言われているような気がしなくてもないが気をもむ必要がなかった。というより、そのような繊細な心を遊子は持ち合わせていなかった。

それから数日、遊子はくだらない言いがかりをつけられたり些細ないたずらにあったりしたがこれといって問題のないものであった。

矛先が遊子に向いたことで沢渡の表情は曇っていたが彼女に対するいじめは軽減されているように見えた。しかし、群れから離れる意思がない限り、沢渡の立場は変わらない。クラスメイトは彼女らのグループを除き、それほど悪い人間などいないのだから早く見限ってしまえばよいのだろう。一人でいれば、話しかけてくれるだろうに。

（女って面倒くさい）

自分の性別を無視した言葉が頭に浮かぶ。

遊子の物怖じしない態度に飽きたのか、それとも級友に『東雲』の意味を聞いたのか知らないが翌週には私物がなくなること、足

をかけられることもなくなった。遊子としては煩わしさに解放されたわけだが、違う面倒がでてくる。

沢渡だ。

顔色が悪く、おびえるように視線を泳がせている。

（これは面倒だな）

視線をそらしてしまえばいいものの、遊子にはそれができなかった。

暗くよどんだ気配が沢渡の周りに立ち込めている。

ほかの誰かにも見えているのだろうか、それは。

本来、不可視のそれは沢渡の周りを重く濁らせていた。

「迷ひ神か」

遊子は幼いころから散々言われてきたその言葉を漏らした。

「顕在化しなければよいが」

眉間に深いしわを残し、遊子は小指の付け根を噛んだ。

二 迷ひ神

東都学園自治区、学園の周りはこのように呼ばれている。

東都中心から西に四十キロほどのそこは、元々、面白みのない田舎で、なにもない山間部である。避暑地として観光客が訪れることはあっても、好んで住む場所ではない。都内にいくには電車の乗継が必須であり、一時間半ほどかかるわけで若者には退屈な場所だといえる。もつとも電車の乗継という行為ができるのは、箱入りのそつた学園生徒のほんの一部である。

よつて、学園設立当時は陸の孤島と揶揄されたが、親ばかな有力者がPTAになることによつて、子どもたちに不自由させまいと努力した結果、今現在の様相にいたる。

自治区内の総人口は二万人に満たないのに、やたらファッションビルが目立つ。でなければ娯楽施設か、スポーツクラブ、美容室といったところか。一部区画だけ見れば、都内と遜色ない。

そうそうたるブランドの看板が立ち、小銭も触つたことのないような青少年少女たちが親のカードを湯水のごとく使う。かわりにスーパーといった生活感の漂う小売業は少ない、コンビニはいくつかあるが内容は他地域のものとは比べるとまったく異なる品揃えである。

客単価を考えれば元がとれるのだろう。学園生徒だけでなく近隣の別荘からの客もいる。どちらにしても上客だ。

(どこに行けばあるんだろう?)

遊子は目を糸のように細めた。買い物wantedがしたいが、目当ての店がどこにあるのかわからないのである。田畑に囲まれた田舎で育ち、中学まではバス送迎付きの女子校に通っていたわけである。箱入りと言われれば、否定できない彼女に街中で買い物というのは難問に違いなかった。

しかも買うものが問題である。

毎月のように送られる母からの服、それは比較的地味なものを着ているからよいとして。

（まさか、もうサイズが合わなくなるなんて）

遊子はリネンブラウスの上に手を置いた。肩紐が締め付けられて痛い。

大変贅沢な悩みであるが、胸部の肥大による下着の不合というわけである。細身で露出が少なくてわかりにくいが、同年代の平均より遊子のそれは大きい。

母親に電話で相談したところ、専門店にいったサイズを測ってもらえということ。

「歩いていればそのうち見つかるか」

遊子は一番近いファッションモールに入ることにした。

正直言えば、人ごみは好きではない。モール内は人ごみとは言わないまでも、それなりの人通りがあった。学園生徒らしい若者が目立つ。

（目がちりちりする）

遊子は通りすぎる人間にまとう静電気のようなものが見えていた。本来、不可視のはずのそれを見るのは遊子が母からの遺伝だという。母方の親類には同様の症状を持つものが多い。

『迷った神さんがすがりついとるんよ』

母の言葉が憐れむ声であったのは覚えている。だからといって、同情するなとも言った。矛盾した言葉だった。

実家をでてから、その症状はどんどんひどくなる。それは、遊子に変化が起きたというより、東都自治区という場所が母の言う『神さん』が集まっているようであった。学園内は比較的ましだが街中にでるとひどくなる気がする。

『神さんには悪いけど、それを相手にしちゃいかんよ』

（気が付いた相手を引き込もうとするから）

遊子は何事もないように通り過ぎる。

いや、過ぎようとした。

（いやーなの見つけた）

遊子は斜め前の店舗を見た。比較的カジュアルなアクセサリー店である。見つけてしまったのなら、目を離せそうにない。

静電気などという生易しいものではなく、黒く立ち込める雷雲のような空気だった。先日、教室でみたそれよりも濃い。

金髪に痛々しく開けられたピアス、シフォンワンピースを着た少女はそれよりも痛々しく見えた。メイクで隠せないくまと青ざめた唇が沢渡の不調を目視させていた。

震える指先には値札のついたリングを持っている。

くすくすと不愉快な笑い声を立てるのは、先日まで遊子にちょっかいをかけていたじめグループの女子三名だった。

「じゃあ、がんばって」

背中を叩き、店の外にでる。

沢渡は、手にアクセサリーをつかんだまま、深くうつむいている。

（まさかね）

遊子は面倒くさそうにため息をつく、店に入った。

「こんにちは、偶然だね」

あまり遊子らしくない声をかける。

沢渡は驚いて肩を震わせた。

「あつ、東雲ちゃん。ぐ、ぐうぜん」

しどろもどろに答える沢渡に、遊子は持っていた指輪を取ると元の位置に戻した。

「あつ」

何か言いたそうな沢渡に遊子はそつと耳打ちをした。

「そこ、防犯カメラ映るってわかってる？」

「!？」

冗談みたいにドラマのような話である。わざわざ防犯カメラのある前で、万引きをそそのかしたのだ。悪意以外の何物でもない。

「場所、かえる？」

「えっ、でも、まゆちゃんたち……」

沢渡は外で待っているはずの『友人』を見るがそこに誰もいない。

「捕まるかもしれない人間のそばにいたら、共犯と思われるからね」

遊子はそっけなく言うと、沢渡の手首をつかんだ。

遊子はモールの外まで沢渡を連れ出すと、周りに人がいないことを確認する。近代的なさきほどまでの場所と違い、歪な石畳が道を作っている。赤い柱が道の両脇に連なっている。奥に寺社があるのだろう。ノスタルジックな雰囲気を持つ小路だ。

軽く息を吐き、つかんでいた沢渡をはなした。

「お金、困ってるわけないよね」

確認するようにたずねた。遊子たちのいる弥生寮は、他の寮よりもランクが高い。洗濯物も掃除もハウスキーパーがやってくれる。そんなホテル並のところに入る生徒が親から十分小遣いをもらっていないわけではない。

「だって、ゲームだって」

目線を泳がせ、落ち着かない様子で沢渡は言った。

「じゃあ、沢渡さんは楽しい？それ」

遊子は、善悪云々を語る気はない。

経済観念の崩れた人間にささいな金銭損失の積み重ねを語っても理解できないだろうし、説明は難しい。遊子は学園内では比較的同時な金銭感覚を持っているが、それは比較であってやはり世間ずれしている、うまく説明できる自信はない。

進路に関わる、内申に関わるというのも違う気がする。

だから、このようにたずねた。

「たのしい、わけ、ないよ」

漏らすように答えた。かすれる声に嗚咽が混じっている。

「でも、やらないと。ともだちじゃないって、いう、から……」

唇をかみしめる。染めた髪もあけて固定していないピアスも露出の多い服もともだちだからとあわせたもので。

「そんなのがともだち？」

ともだちというものを数多く持ったことのない遊子にはよくわからない。

「みんな、私よりもいい家柄だし、私がかんばないと」

皆とは言わないが、選民意識の凝り固まった人間が少なからずいる。あの連中がいい例だった。

「家柄とか別に関係な……」

「東雲ちゃんにはわかんないよ!!」

沢渡は遊子の言葉を遮った。

肩を震わせ、涙がこぼれないように瞼に力をいれている。遊子と目が合うと、はっとなり背を向ける。涙のしずくが地面に落ちた。

「……ごめ……ん」

沢渡は言い終わる前に走りさっていた。

「わからないかあ」

遊子は奥の神社のベンチに座っていた。赤塗の社と青い公孫樹いちようじゅに囲まれ、周りには誰もいない。静かだが寂れているという雰囲気はなく、きれいに手入れされていた。

学園関係者には神事に携わるものも多いので、寺社の数は案外多い。表の若者向けのビルに気圧されがちだが、昔ながらの門前町もある。元々、こんな田舎に学園が建てられたのは、信仰の要があることが一つの理由だったからである。

めったなことではへこまない遊子でも、沢渡の言葉はひびいたらしい。

東雲家、東の十華族に数えられる名門である。比較的近い時代に皇族から分かれた名家であり、酒造・食料品を中心として現在は金融・保険も手掛ける財閥だ。

家と本人は関係ないというのは無理である。少なくとも遊子はそのように思っている。

でなければ、幼いころから怪しげな大人に連れ去られそうになったり、送迎付きの女学校に通わされたり、許嫁候補の青年たちと顔合わせをすることもないだろう。

現在も電話で監視されているが、以前に比べたら自由になったも

のだ。気軽に買い物に行けるのは、東都自治区だからこそだと思う。
そんな箱入りお嬢様が一般入試試験を受けて、入学してくるとは
誰も思わない。

沢渡の言葉から、遊子があの『東雲』のものだとわかっているの
だろう。

（いっほど価値はないというのに）

遊子は深くため息をついた。ため息は幸せをこぼすというが、本
当だろうか。母は『迷ひ神』を呼び寄せるからやめろといった。

（そろそろ決壊だった）

澱み凝り固まったそれが許容量をこえたとき、『迷ひ神』は孵化
する。孵化してしまえばどうにもならないだろう。

『迷ひ神』、一般的に心霊現象といえわかりやすい。どこにで
もいるが、どこにもいない。小さなものに何の影響力もないが、そ
れが強大化すれば人に害をおよぼす。

（どうすればいい？）

沢渡をあグループから引き離せばいいのか、それで解決になる
のか。いや、なると思えない。一時的なしのぎになっても、いつか
顕在化してしまう。

他の人間には、もっと簡単なことが答えとしてでるのだろう、し
かし、遊子にはそれがわからなかった。大人びて冷静な一面、ある

部分ではひどく幼い思考でできていた。

遊子に友人といえる人物は一人しか思い当らなかった。

（どうすればいい？）

「総一郎……」

遊子は、五年前に別れたきりの幼馴染の名前をつぶやいた。

三 顕在化

起こるべくして起きたとしか言えなかった。

教育委員会の関係で午前中に授業は終わった。遊子は帰るところだった。

女生徒の叫び声が、中庭のほうから聞こえた。

遊子は革靴の踵を踏みつぶしたまま、外へ向かった。

嫌な予感というものは当たる。叫び声は聞き覚えのある声だった。遊子は鞆の中から、袱紗ふくさに包まれた細長いものを取り出すと、異形のものの前に躍り出た。

それは、到底生き物とも思えない姿をしていた。いや、もし昆虫が巨大化し人類のような進化を遂げたらそのようになっていただろう。

そんな奇妙なものがそこにいた。

異形のもものは、沢渡の後ろでなにかをむさぼっていた。彼女の身体から発せられる澱んだ空気を食べていた。ぱりぱりと音がする、ゆで卵のように周りを覆う黒い殻が剥がれ落ちる。

「どしたの？マユちゃん」

わけがわからないと沢渡が首を傾げている。

沢渡の前には、沢渡の『ともだち』の一人が震えていた。腰を抜かし、膝が笑っている。

「マユ、なに。新しいギャグかなんか？寒いんだけど」

もう一人の『ともだち』は、異形のものに気付いた様子はない。ただ、マユの不可解な行動に首を傾げている。

「えっ、あれ？あれって、なんなの？」

残り一人の『ともだち』は、沢渡を指して目を細めている。なにかしら見えているようだが、それがなにかわかっていない。

周りに立っている生徒の反応も、同じく三様である。

あからさまに動揺しているものと、まったく理解できないものとおかしなことに気が付いているがそれがなにかわからないもの。『化けもの！』と驚き、走り去るものもいる、それは正しい選択である。

「沢渡さん」

遊子は異形のものに宿主に声をかけた。

「あつ、東雲ちゃん」

沢渡が振り返った瞬間、周りに風が起こる。振り向きざまに節足

動物の翅がかまいたちを起こす。

『きゃああっ！』

周りにいた人間の衣服や肌がきれる。遊子の制服も袖が大きく切れていた。どくどくと血を流しているものもいた。

「うわああああ」

どうすればいいのかわからず立ち尽くしていた生徒たちが逃げ出す。傷を負っていたものは、先ほど『化け物』を認識していたものばかりであった。

擦り傷も負わず、何が起こったのもわからないものたちは、とりあえずここには危ないと察知したらしく足早に去っていく。

顕在化の影響を受けるのは、遊子のように見る能力の長けたものほど大きい。肌だけでなく、衣服も切れているのは、その影響はかなり大きいものなのだろう。

「あれ？みんないなくなっちゃったね。どうしようか？」

「さあね。なにか用事でも思い出したんじゃない」

遊子は苦しい嘘だと思いつつ、平静を装う。

「そっかあ、仕方ないなあ」

沢渡は自分が起こした現象が見えていないようだ。

「ねえ、東雲さん。一緒に帰らない？」

自分の背に張り付いているものにまったく気づく様子がなく、沢渡は土気色の顔から笑顔を絞り出していた。

「どうしたの？なんかあたし変？」

もちろん変に決まっている。自分が一人にならないように、無理に髪を染め、耳に穴を開け、趣味でもない服を着て、興味の無い話を覚えた。

どうにか何かの輪に加わろうと努力した。迫害されようが、しがみついた。その結果がこれだ。

気づいていたはずなのに。

「悪かった」

遊子は化け物の糧になろうとする少女に詫びた。

気づいていて関係ないと割り切った。

「どしたの？なんか変だよ、あつ、東雲さんが変なのはいつものことだよね」

作り笑いが痛々しい、無理をすればするほど澱みは大きくなり、化け物はよりリアルにグロテスクになっていった。

（どうにかできないか）

哀れな級友を助けることはできないのか。

「ああ、なんでもない。帰ろうか」

沢渡の手を握る。寮に帰る道、裏門を抜ければ今は人通りも少ないはずだ。

背後では、生徒が教師を呼ぶ声がする。

これ以上、誰にもこれを見せてはならない、沢渡のためにもそう思った。

「でね、マユちゃんは全然似合わないっていうんだ。ひどいよね」

手をつないだまま、沢渡はただただおしゃべりを続けた。幼稚な行為であるが、それは遊子を逃がさないための策だろうか。

遊子は以前のときのように相槌を打つ。

話を聞くと、マユたちのいじめはエスカレートしていたようだ。無理やり押さえつけていた感情が漏れだし、奴の恰好の餌食となっていた。

澱みはためてはならない。

遊子はそれを知っていた。

澱みは澱みを呼ぶ。もし、人前で沢渡につく化け物が完全に現れ

たら新しい澱みが生まれるだろう。それは避けねばならなかった。まだ、完全に顕在化していない、化け物を認識できない生徒がいたのがその証拠だ。

彼女から漏れ出す負の澱みは、次第に少なくなっていたが、化け物は離れることはせず石づきのように根付いていた。

とどめることなく喋っていた沢渡は、一瞬足を止め、一呼吸おいて遊子に言った。

「ねえ、明日、一緒にお弁当食べよ」

少しおびえるような顔で遊子を見る。こんな簡単な言葉に勇気があるほど、彼女の心は折れていたのだ。

遊子は、珍しく口元をゆがめた。笑みというにはぎこちない、それが彼女の精いっぱいだった。

「ああ。わかった」

遊子の返事を聞いた瞬間、病人のような沢渡の顔に一瞬赤みが走った。

身体にあふれていた澱みが薄くなる。

（いまだ）

「じゅめん」

遊子はハンドタオルを彼女の口に突っ込むと、顎に拳を振り上げ

た。

沢渡は何か起こったのかも理解できず、意識を失った。脳を揺らし気絶させた。遊子は倒れこんだ沢渡を受け止めると、彼女と化け物を結ぶ澱みを絶ち切った。

遊子の右手には小刀を持っていた。柄に拵えのついた小柄だった。ただの金属とは違ったきらめきは、物体ならざるものを切る能力を持っていた。

護身用にと母が持たせたものだ。

沢渡の異変をいち早く気が付いたように、遊子には昔から見えざるものが見ることができた。

『ギイイイイ』

耳触りな音が響く。大切な食事を邪魔されたと怒っているのか。遊子めがけて節足を振りかざしてきた。

遊子は沢渡を芝生の上に寝かせる。化け物は餌の供給をしない沢渡には興味を見せず、遊子に気持ち悪い複眼を見せる。

遊子は袈紗からもう一本の小刀をとりだすと一直線で林の中にはいった。

化け物は木々をすり抜けることもできず、身体のアちこちを枝にぶつけながら追いかけてくる。食べ過ぎた餌のおかげで、だいぶ物体に干渉できるようになっていた。

（うまく隠れられるか？）

面と向かってあの化け物に勝てるわけない。逃げ切るか、隙をうかがうかどちらかだ。

（首をちぎればどうにかなるか？）

遊子は合理的な考えをめぐらしているだけで、それが恐ろしい行為だと考えていない。人なら首を刈れば絶命する、首がなくともしばらく動き続ける動物はいるが出血でそのうち死ぬ。あの化け物が出血で死ぬとは思えないし、脳髄でものごとを考えているとはおもえない。だが、口から摂食らしき行為をしていたところを考えると狙ってみる価値はあった。摂食手段を絶てばそのうち消えてなくなる。

（プラナリアみたいに分裂したら嫌だな）

ネガティブな考えに頭を振り、遊子は林を抜ける。湧水の流れる池があった。名産の山葵^{わさび}が栽培されている。近くに農道と農機具を置いた小屋があった。学園が建てられてから東都学園自治区の一次産業は衰退したもののきれいな水と涼しい気候を必要とする山葵栽培は続いていた。

遊子は小柄を一本湧水に浸し、ついたしずくを自分に振りかける。同じように、小屋の中にあったタオルを湧水に浸し、小柄のしずくを落とす。

プレハブの掘立小屋の裏に隠れる。

複眼を動かして化け物が森から出てくる。

（目は見えている？）

もし、目以外の感覚器官を使っていたら、隠れているのは無意味だと言える。

あの様子だと、複眼は飾りではないらしい。

機械音にも似た足音を立て、少しずつ近づいてくる。

遊子の持つ武器は、小柄が二本だけ、心もとないが仕方ない。

化け物の首は、カマキリやトンボと同じように、細いつくりをしていた。うまく小柄を使ってひねれば千切れないこともないだろうか。それとも二本の小柄を合わせて、はさみのように切れないだろうか。

前者のほうはまだ、成功確率が高そうだ。

脇と背中に脂汗をかく感覚がする。

ぎちぎちと、顎を鳴らしながら節足動物は近づいてくる。

ぎりぎりまで気づかないでいてくれ、と祈りながら、遊子は濡らしたタオルを右手につかむ。

化け物が、プレハブ小屋の真横を通り過ぎる瞬間を狙い、化け物の翅にタオルを巻きつける。濡れたタオルは羽音を止めた。

間髪入れず遊子は、持っていた小柄を右手に持ち替え、化け物の首に振りかざす。

（やばい）

化け物が身をよじったため、狙いの首からずれ、人間でいう肩の部分に突き刺さる。耳を覆いたくなる鳴き声が間近で響く。小柄を引き抜くと、血液のかわりに黒い粒子がこぼれる。それは、空中で漂うと、霧散した。

濡れタオルの拘束を解こうともがく化け物にもう一度、小柄を振りかざす。今度は、首に突き刺さったのだが。

（しまった）

先ほどの黒い粒子のせいだろうか。母が特別に作った小柄は、ただの小刀に成り下がっていた。化け物に与えるダメージはほとんどない。

遊子は、突き刺した小柄を抜くと、もう一本の小柄に持ち替える。振りかざすが、空振りに終わる。

かわりに、振りかざされた節くれの足が腹に当たる。みぞおちに関節部分がめり込み、身体が吹っ飛ばされた。そばに生えていた木の幹に打ち付けられ、口から吐しゃ物がこぼれていく。

（今日、なに食べたんだっけ？）

口の端をぬぐいながら、そんなことを考えてしまうのがおかしかった。人間、どうしようもないときは、くだらないことを考えてしまうものである。

持ち替えた小柄を握りしめ、近づいてくる化け物を見据える。走り出したところで逃げられるわけがない。なにかいい方法はな

いかと、頭を回転させるが、なにより手持ちの武器がない。

化け物は翅の動きを阻害するタオルを引きちぎり、油の切れた機械音を鳴らしながら近づいてくる。

さきほどまで、この外骨格生物は遊子を新たな食糧とみていたようだが、今は違うらしい。翅を拘束されたのと、小柄で突き刺されたことに腹を立てているようだ。周辺に小さな竜巻を起こしている。

木を背に、身体を移動させるが、背中を見せたらそこでアウトだろう。尖った鉤爪のような前脚で、背中を突き刺されるだろうか。それとも、鎌鼬かまいたちで切り刻むだろうか。

もう一度振りかざされる化け物の前脚をよける、続いて反対の脚がふりかかってくる。よけきれず、かわりに横跳びをした。衝撃は幾分和らいだが、脇腹に衝撃がかかる。地面をすべるように、身体がとんでいく。

（さすがに、終わりか）

制服は化け物の鉤爪にひっかったのか、裂けてぼろぼろだった。まだ長袖を着用していてよかった。腕に擦り傷はなく、足は露出を避けるためストッキングをはいていたので、それほど大きな傷はない。

傷物になることを厭うような女心は持ち合わせていない。それは、別のところで傷をつけたくなかったのだが、どうしようもない。

一瞬、古い思い出が頭を駆け巡ろうとしたのを、首を振ってかき消す。

（せめて、眼球くらい潰してやれないか）

最後にもうひとつだけ悪あがきをしようかと思い直し、小柄を握りなおしたその時だった。

振りかざされた化け物の前脚がとんだ。

化け物の咆哮が耳に響く。

遊子は信じられないと、目の前に現れた人物を見た。

倒れこんだ遊子をかばうように、青年はそこにいた。身の丈の半分ほどもある太刀を片手に、口を一字に切り結び、先ほど斬りおとした化け物の前脚が霧散するのを見ている。

その横顔に遊子は見覚えがあった。少年から青年になっているものの、硬質の髪、狐を思わせる三白眼、不機嫌な薄い唇、忘れるわけがなかった。

「総一郎？」

自分より頭一つ大きな青年を遊子は呼んだ。

いつのまにかさがるように服の裾をつかんでいた。

懐かしい幼馴染の顔だった。

「……」

総一郎は視線を一瞬遊子に落とし、なにか言いかけるように口を開いたが何も言わずにつかんでいた遊子の手を振り払った。

「おいおい、女の子相手にそれはないんじゃないのかな」

いつのまに現れた青年の一人が言った。長身の男で総一郎と同じく日本刀を持っていた。もうひとり、身の丈よりも長い槍を持った大男が立っている。

「赤城には関係ない」

赤城という青年は、端正な顔を子供っぽくすねて見せた。

「はいはい、お仕事ませふか」

日本刀の刃にポケットからとりだした小瓶の水を振りかける。しずくがきらきらと輝いて、刃先からぽたぽた零れ落ちる。

化け物の死角に回り込むと、間接部分を撫ぜるように切り込んでいく。触れた部分は切れたというより、焼けたようにじゅわじゅわと音をたてる。

「青柳、たのむわ」

赤城と総一郎が撫でるように切りつける中、もう一人の男は巨大な槍で弱った部分をたたきつぶしている。槍といっても刃先が異常に大きく、形状としては原始的な刀に似ていた。

手足をもがれた化け物は、バランスをとれず地面に倒れこんだ。

「止めか？」

青柳と呼ばれた男は、武器に通ずるものがある無骨な声で言った。

「おい、まだ、はええよ」

化け物は後ろに伸びた尾のようなものを伸ばし、残った手足で体勢を立て直した。

総一郎と赤城が交互に胴体を刻む。固い外皮が剥がれ落ち、中から黒い澱みの塊が見えた。

青柳は矛にたつぷり水を含ませると、打ち込むように澱みの中心に突き刺した。

化け物はぎちぎちと不愉快な音をたてながら消えていった。

「総一郎……」

無愛想な青年は来ていた上着を脱ぐと遊子に投げた。

「悪いがついてきてくれ」

幼馴染は淡々といった。

（やっぱりそうか）

遊子はまだ温かい上着をつかむ。

（私は嫌われているんだな）

五年ぶりの再会はそれほどうれしいものではなかった。

四 咲耶姫

冷たい目をしたまま、幼馴染の青年は着ていた上着を投げた。

破れた制服の上に総一郎の上着を羽織る。情けないことに、今頃、指が震えてきた。腹を押さえる、あばらは折れてないようだ。擦りむいた足は、たいしたことはない。

遊子が立ち上がるのも確認せずに、三白眼の青年は速足で歩き始める。

「冷たいやつだな」

落とした小柄を差し出したのは赤城という美青年だった。無骨な青柳は何も言わないものの絵本のくまさんを思わせる目が心配しているのを物語っていた。手を貸そうか、戸惑っているのがつづらな瞳を見ればわかる。

「女の子が向こうに倒れているのですけど」

「それなら、もう保護してるよ。君の荷物はほら」

赤城は青柳をさす。いつのまにか青柳が遊子の鞆を持っていた。

「木月の知り合いとは妙な縁だね。都合がいいといえば、いいのかもしれないけど」

青年は含むような言い方をする。

「俺らの主人が君と話したいらしいんだけど、時間いいかな？」

「ここで断るほど、空気は読めなくありません」

遊子は赤城に都合のいい返事をいった。

（どうやってここまで来たんだろう？）

遊子は狭い路地で曲がりきれないようなリムジンにのっていた。獣道に近い林の中にとめてあるとは。高級車とはいっても、ここまで長いと下品に思えてくる。

（こんなに長いやつは初めてだ）

彼女自身、育ちはいいのだがこの主人はさらにグレードが上のようである。

車内のテーブルには紅茶、ビスクドールのような肌と髪を持った美少女がそこにいた。服もまるで彼女のためにしつらえたかのようなレースをあしらったドレスだった。

年のころは遊子と変わらないくらいだろうか、肌も髪も色素が薄いのに、目の色だけはモンゴロイドらしい真っ黒な瞳をしている。

「すまないな。着替えはあるが、場所がなくなてな」

見た目とは想像できないほど低い声であった。少年から青年に移り変わったころのようなハスキーな声だ。

外傷は治療してもらい、あばらも遊子の思った通り折れていなかった。

医者 of 真似事をしてくれたのは、絵に描いたような老執事だった。浮世離れた燕尾服が良く似合っていた。モノクルでもかければ、さらに似合うだろう。

「それより、屋敷に来てもらったほうが早いと思うてな」

古風な喋りは、見た目と声のちぐはぐをさらにこじらせているようだった。

「自己紹介が遅れたな。妾は咲耶わらわという、まあ皆姫と呼ぶが」

姫はちらりと後ろに視線をよこす。

「後ろのは、左から木月、青柳、赤城だ。木月はいうまでもなかったか」

「咲耶…姫…」

遊子にも聞き覚えがある名前だった。中津国の二つ柱、東皇家の長、つまり東皇の第三子の名前である。

（リアルプリンセス）

なるほど、自分とはグレードが違うわけだ。元々、遊子の家、東雲家が名家たる由縁は東皇家の血が流れているからである。『東雲』は臣籍降下により『東』の名をいただいたのが起こりである。現在では酒造メーカーとして名を馳せているが、それでも東皇家と比べるべくもない。

（これが今の総一郎の主人か）

片田舎でくすぶって自分のようなものの御守をするよりずっといいのdarou。遊子は出世したなと、後ろに控えている総一郎を見た。

総一郎は視線を合わせようとせず、無表情に座っていた。代わりに、赤城がにっこりと愛想を振る。

「東雲遊子」

遊子がいうまでもなく、咲耶姫は言った。

「失礼を承知で勝手に調べさせてもらった。気を悪くしないでくれ」
「いえ、もったいないお言葉です」

きわめて儀礼的に遊子は答える。

「血の流れはほとんどなくとも、元は同じ流れを汲むもの。それほど気をはるでない」

そうは言うもののそれとこれとは別物である。なんとなく本心から姫がするように言ってくれているように感じたが、そこに甘える気はなかった。

頑固な遊子の性格に気が付いたのか、咲耶姫はマシュマロを口に含んで紅茶を飲んだ。

「本当は、木月に詳しく聞きたかったのだが、あいつ何もしゃべることはありません、と一点張りなのだ」

総一郎は眉一つ動かそうとしない。どうやら、本当に何もしゃべっていないようだった。

「もうすぐ屋敷に着く。着替えてから、詳しいことを話したい。本当にひどい怪我はないのだな」

「ええ、大丈夫です」

姫が窓の外を見ると、立派な門構えの向こうに古風な洋館が建っていた。

「こちらでございます」

昨今の喫茶店にいるものとは別物の使用人がいた。近代を意識したのか、ドレスではなく着物にエプロンをつけていた。メイドというより女中のほうがふさわしい呼び名であろうか。

「着替えたら、広間にきてくれ」

姫君はレースをひらひらさせながら、階段を上って行った。赤城、青柳、総一郎もそのあとに続く。

「よかったな。いい主人を見つけて」

嫌味の一つくらいいいだろうと、遊子のかすれる声で言った。

木月総一郎は五年前に村をでた。

地元の進学校に通っていた総一郎は、入学すら難しい東都学園に編入していった。

ああ、そうか。

（そこまでして、私のそばが嫌だったんだな）

幼馴染に置いて行かれた遊子はそう思うしかなかった。

そのまま大学に進学したと聞いたが、こちらの姫君につかえていたとは。

下宿先も教えてもらえず、会うこともなかったのにこんな形で出会えるとは。

嫌がらせのひとつでもしたい、意地悪な気分になっていた。

用意された服は、シルクのブラウスと赤いスカートだった。ストッキングでも木綿の靴下でもなく、シルクの靴下が置いてあるのは趣味の良さを感じた。

バスルームがあり、下着まで用意されていたがとりかえる気分にはならなかった。

「E65」

どこまで詳しく調べられているのだろうと、遊子は下着を元のか

ごに戻す。合わないわけではなく、ただ気分が悪かった。

時計を見ると七時半を回っていた。いつもの時間まで待っていたら、いくらなんでも待たせすぎだろうと、携帯電話を取り出す。

「あつ、遊子です」

『おお、遊子か』

珍しく父が出た。電話にでどころか、食器すら片付けない古風な男である。

さらに珍しいことに機嫌がいいことだった。厳格を売りにしているらしく、酒が入らない限りめったに笑わない男である。酒を浴びているのだろうかと思っただが、まもなく上機嫌の理由は判明する。

「うれしいぞ。本家の姫と学友になるとは」

『本家』というには随分離れすぎていると思っただが、なるほどこういうことか。実家にはすでに根回しされているらしい。

電話に出たのも、もしかしたら姫君側からまた連絡があるのかもしれないと踏んだからかもしれない。

「学友とまではいきませんが」

「総一郎め。出世したな。今度帰ったら、旨い酒をふるまわんとな」
すこぶる調子のいいことをいつている。酒だけは売るほどあるのだから。

なるほど、総一郎のことも耳に入っているのかと。

「新しい振袖でも仕立てようか。姫のそばにいておかしくない恰好をせねばな」

「振袖はちよつと違ふと思います」

姫、ロリータだし、とはさすがに突っ込めなかった。だからといって、フリルのスカートをチュチュ付きで仕立ててもらふ気にもならない。

舞い上がっている父の電話を切るともう八時を回っていた。

母親のほうに相談がしたかったのに、仕方がない。

広間に入ると長いテーブルとその上に冠型のナプキンが並んでいた。

待たせたと思ったが、そうでもなかったらしい。咲耶姫は風呂上りらしく、部屋の隅にオットマンを置き、赤城に髪を乾かせていた。紅潮した頬と薔薇色の唇は少女とは思えない色香を醸し出していた。ドレスは先ほどよりも落ち着いたものを着ていた。

「おや、風呂には入らなかったのか？狭い浴槽が嫌なら、離れに浴場があるぞ。それとも、擦り傷にしてみるか」

「いえ。そういう気分ではないので。気になるようでしたら、お時間いただけますか？」

「うーむ。なら一緒に入るのも一興だったな」

「お戯れを」

一緒に入ったら姫の色香に当てられて鼻血の海になっているだろうと、遊子は思った。

「さあ、席についてくれ。嫌いなものはないだろうな」

赤城は姫の髪を束ね、ゆるやかに巻き上げていた。ヘッドドレスをつけたらアンティークドールそのままの姿だった。

遊子は壮年の使用人に促され、長テーブルの端に座った。

（リアルセバスチャン）

口髭がよく似合っていると思った。老執事とはまた、違った趣がある。

遊子の対面にはホステスたる姫君が、その両脇に赤城と青柳が座っていた。

「木月はどうした？」

「食べたくない」と

青柳は簡潔に答える。

「客人に失礼だろ」

咲耶姫は老執事から携帯電話を受け取る。短縮番号を押す。

「おい、食べたくないとはどういうことだ？あっ？そんなの関係な

い、妾が来いといえは来るのだ。いいな、絶対だ、三十秒以内だ！
」

理不尽な言い方でまくしたて一方的に切った。

「まったく、なにが気に食わないんだか」

（なんとなくわかるけど）

遊子は注がれたグラスの結露をじつと見ていた。

三分後、目つきの悪い青年は不貞腐れた様子で入ってきた。短い襟足をかいている。

「遅刻だ」

「申し訳ありません」

急ぐ様子もなく青柳の隣に座る。

総一郎を待ったかのように、給仕が前菜を用意する。海老と夏野菜のマリネは、酸味が強く遊子好みだった。

食前酒はシャンパンを用意されていたが、青柳以外はミネラルウォーターだった。

「食事中に話すのはマナー違反か？」

家族から食事中のテレビも会話も禁止されていたが、遊子はどちらでもいいと思っている。

「どうぞ」

海老がぷりぷりして美味しい。皿が空になると入れ替わりでホウレンソウのポタージュがでてきた。

「単刀直入に言えば、妾の仕事を手伝ってほしい。東雲遊子」

がちゃんと皿が揺れる音がして、総一郎が立ちあがった。

「なんだ？起立は許してないぞ」

「それは反対です」

「おまえの意見なぞ聞いていない」

姫はスープをすすする。気品のある顔に全く似合わない、ゆがんだ笑みが浮かんでいた。

「手足に無駄口は必要ない。黙って頭の言つとおりにしろ」

有無を言わさぬ言葉である。幼さの残る麗しい少女の姿に、青年のような低い声のちぐはぐさが威圧感を倍増させる。

「わかりました」

総一郎は苦虫をつぶしたような顔で席についた。

「話を続けようか」

空になったスープが下げられ、ヒラメのムニエルが置かれる。姫はナイフを入れ、フォークで突き刺す。白い犬歯を輝かせ、長いまつげを震わせて言う。

「妾は目がほしいのだ。おまえのような目がな」

「ゴーストバスターズの真似事ですか」

遊子は冗談めいた。

「まあ、そんなもんだ。姫とは民のために働くものだよ」

咲耶姫もうそぶいてみせる。

「おまえは目がいい。妾たちの見えない化け物が見えるのだろう。だから、あの化け物を誘いだし、人目につかぬところまでおびき寄せたのだろう？」

姫はミネラルウォーターを口に含み、唇をぺろりと舐める。小悪魔のような悪戯っぽい仕草だった。

「妾は考えることができるが見ることはできない。おまえが必要なのだ」

男女問わず惑わすような怪しい視線だ。

「なあ、妾と一緒にきてくれないか？」

「有無をいわさないように思えます」

遊子は率直な感想を述べる。

「貴方のようなかたに頼み込まれて、簡単にいいえといえる人間はそうはいません」

「そんなことはない」

「それに、父に連絡を入れたということはそういうことなのですね」

「察しがいい」

姫はパンをちぎり、口に含む。

遊子は冷めかけたムニエルにナイフを入れる。

「断れる理由がどこにあるのでしょうか？」

遊子はムニエルを口に含んだ。

姫はにやりと笑うと、

「話のわかる人間で助かる」

むすりとした青年に目配せする。

「安全はできるだけ保障しよう、できるだけな
「さいですか」

できるだけに強調されていた。

「今夜は泊まっていけ。寮には連絡してある」
「手際がよいですね」

遊子は料理を片付けることに専念することにした。
考えても仕方ないこともあるのだ。そういう場合、遊子は流れの
ままに進むようにしている。

「安請け合いするな」

先ほどの部屋の前で待っていたのは、総一郎だった。

「関わるべきじゃないってよくわかっているだろ」

「お前はとうなんだ」

遊子は腕を組み、仁王立ちをする。

他のものの前とは違う、女らしさのない喋りだった。

「てつきり、御守が嫌で出て行っただけだと思っただけ、あれじゃ私以上にひどいだろう？」

「俺にはそれだけの利点がある」

無愛想に壁に背を向け、うつむいている。

「おまえは危険をさらしてまで、姫につく理由があるのか？」

「そりゃあな」

沢渡についたそれほどではないにしろ、昔から似たようなことに巻き込まれることはたびたびあった。

母方の遺伝らしい、化け物が見えるのは。

母は対処法を心得ていた。寮に入る遊子に護身具を渡したのも、毎日電話をかけるのもそれが理由だった。多少であるが、武術の心得はある。

母方の遠縁である総一郎も、遊子ほどでないにしてもその能力を有していた。故に今のように咲耶につかえることとなったのだらう。

「父に根回しがあれば断れるわけなかるう」

「お館さまには俺から話しておく」

「オカルトのわからない親父に説明は難しいぞ」

「奥様に話せば……」

「それで納得すれば、私はここにはいなかったはずだ」

唇を噛む総一郎の反応が答えだった。

「また戻れなくなったらどうするんだ？」

遠い眼をする総一郎、記憶の底にあるなにかを反芻している。
狐のような相貌に暗い輝きを見せていた。

「ユズ……」

遊子は懐かしい響きに涼やかな笑みを浮かべた。『ゆうこ』ではなく『ゆず』と呼ぶ。それをいうのはこの幼馴染と母親しかいなかった。

ふいに小さな笑みがこぼれてしまった。

「今度はしっかり捕まえておいてくれ」

遊子は幼馴染の胸を叩くと部屋に入った。

五 転校生

「ここでおろしていただきませんか？」

遊子は鞆を持ち、外をちらちら見る。

破れた制服のかわりに、新しく用意された制服を着ていた。昨日あんなことがあっても、学校に行く、そういう性格なのだ。

「なぜだ？まだ、学校まで一キロはあるだろ？」

咲耶姫が首を傾げる。今日は総一郎も含め、三人のお供は誰もいない。セバスチャンだけが、車を運転している。

無駄に長い高級車で校舎まで送ってもらうのはお断りだ。高級車自体は珍しくないが、無駄に長すぎるので目立ちすぎる。

「ここで結構ですので」

舗装されているが何もない田舎道である。ランニングをする運動部が通りかかるくらいだった。

「謙虚なやつだな。ほれ、あつ、これもだ」

姫は携帯電話と充電器を投げてよこした。一見ただの携帯電話のように見えるが、無駄にアンテナが大きい。これが衛星電話というものだろうかと首をかしげた。

「妾と木月、赤城、青柳、あと念のためもう一つ番号登録しているが、これは使わないでくれ。何かあったときの保険のためだからな」

とても意味深に聞こえる言葉を残す。逆に興味本位でかけたくなかった。

「わかりました」

「では、またすぐ会おう」

これまた意味深の言葉を残し、咲耶姫をのせたリムジンは去って行った。

教室に沢渡は来ていた。いつもの空元気がないぶん、普段より落ち着いて見えた。いつものように群れることはなく、暇つぶしに携帯電話をいじっていた。

あのあと、どのように処理したのかは知らないが、昨日の学園内の騒動はまったくなかったことになっていた。

あの場にいたクラスメイトも、実際、被害にあつたいじめグループの三人も何食わぬ顔で教室にいる。ただ、絆創膏や包帯をつけており、本人たちもそれがどのようにつけられた傷なのか覚えていないようである。

今朝、青柳という青年に聞くと、「大丈夫」とだけ簡潔に答えられたので問題はないと思っていたが。しかしながら、沢渡の顎に大きな絆創膏をはっているとを見ると遊子は大変申し訳ない気分になった。本当に昨日のことは、覚えていないのだろうか。

遊子は遠回りをして沢渡の前に来ると、

「おはよう」

と、挨拶した。沢渡も、

「おはよう」

と返してくれた。

遊子は二つの意味でほっとしながら、席についた。

『本家の姫と学友』

昨日の父の言葉を思い出したのは、朝のホームルームだった。

（このことを言っていたのか）

ホワイトボードには『咲耶』と名前だけ書かれている。皇族には名字がないからだ。

「よろしく頼む」

小柄な美しい巻髪的美少女が立っている。

教室がざわめく。名前だけで目の前の人物がどれほどの人間であるかわかるのだ。

また皇族は慣習から、成人まで公式の場に顔を出すことがないため、姫の顔を見るのも初めてだろう。

「……」

咲耶姫がすれ違うときに、耳元でささやかれた。

「？」

遊子は、意味がわからず顔をゆがめる。

「それなんてギャルゲって顔してるぞ」

悪戯っぽい笑みのまま、少女は一番後ろの空席についた。

「無駄に目立ちますね」

「無駄とはなんだ、失敬な」

咲耶姫は遊子の前の席に座る。パツチリとした目をしたフランス人形のような美少女と、おかっぱの切れ長の目をした地味女が並んでいる。

遠巻きに見る級友たちは、姫のことが気になりつつも話しかける

までにはいかない。

「妾は暇が嫌いなのだ。こんなことなら、青柳も一緒のクラスに入ればよかったな」

「なぜ一番無理のある選択肢なんですか？」

熊のような青柳は到底高校生に見えるはずがない。まだ、総一郎や赤城のほうが無理が通る。

「より面白そうだから」

至極、個人的な意見を言う姫。
なるほど、こういう性格なのか。

「じゃあ、このクラスに入ったのも」

「いい口実だからな」

「それは迷惑ですね」

遊子は面倒くさそうに回りを見る。できれば見比べないほしいと複数の視線を痛く思っていた。自分の容姿が華やかでないことは十分わかつている。

「なんだかんでよく似ているな、木月と。あまりに無遠慮すぎる」

遊子は数学ドリルを解いていた。ながら作業とは、あまり姫に対する敬いのようなものを感じられない。

「そうですか」

と答える。

「改善点にいきます」

さほど、反省の色は見えない。ノートを閉じる様子もない。

「いや、ほめているのだ」

姫はシャーペンでドリルの端に落書きを加える。

「遠巻きにされるとさみしいものがある」

しみじみと答える。

「似ているなんて言ったら、あいつは不機嫌になりますよ」

狐の顔を描く遊子。

「あの野郎の機嫌がいいときなんてあるのか？」

狐の絵に青筋を加える。誰を表しているのか言つまでもない。

「ごくたまに」

少女らしくない口調が続く。遠巻きに見ている学生たちに聞こえないのが救いであろう。麗しき姫君にはふさわしくない言葉が各所に混じっていた。

「なあ、食事はどうすればいい？」

姫君は目をきらきらさせながら覗き込んでくる。何を期待しているのだろうか。

「つと、ちよつと待つてください」

遊子は沢渡のほうを見る。彼女は他の女生徒と食堂へ向かうところのようだ。案の定、いつものグループと離れたことで、他のグループの女生徒が話しかけてきたらしい。おっとりとした、沢渡の性格だから、箱入り娘たちとのほうが気が合うだろう。

（大丈夫ならそれでいいか）

遊子は小さく息を吐く。昨日の約束はやはり忘れていたようだ。それであれば、それでいいと思う。

「どうしますか？ 購買と食堂、あとモールに飲食店ありますが、時間はないのでそれは却下で」

ずいぶん、くだけた口調になったのは、姫の命令である。けして、堅い口調が面倒になったわけではない。

「んー、購買かあ。焼きそばパンの争奪戦とかあるのか、やっぱり？」

どこから仕入れた情報が知らないが、この学校の購買は有名ベーカーリー店から仕入れているので、洒落た名前のパンしかなかった気がする。なにより、購買のおばちゃんはおらず、大手コンビニが

東都学園店』を作っているのだ。

「たぶん、想像しているものほど面白くないかもしれませんが、購買で買って教室で食べますか？」

「ああ、だが、教室は面白くないから、違う場所だのむ。あんまり人がいないほうがよいな」
「わかりました」

遊子はいつもの温室でいいかと頷いた。

「ずいぶん、趣があるな」

B級グルメパンがなくて落ち込んでいた咲耶姫は、さびれた壊れかけの温室に気を取り直していた。

「皆、新しい温室のほうに集まるから、静かなんです」

いつものベンチに座ると紙袋を広げた。一応、姫の座る場所に汚れないようにハンドタオルを敷く。

「今更なんですが、誰かお供をつけなくていいんですか？」

いつもついている三人も、世話を焼く執事もいない。姫ともなれば、それくらいつきそうなものである。

「いつの時代の姫だ、それは」

咲耶姫は紙パックジュースを手に取り、どうすればいいか手をこまねいていた。遊子は自分のパックを見せるとストローを伸ばし、突き刺して見せる。

「十分、いつの時代かの姫ですよ」

と、言いつつも自分も世間知らずな点が多いのであまり大きな口では言えないのだが。

「まあ、世間知らずが多いのはこの学校全体にいえることだから、特に問題ないだろ」

「まあ、そうかもしれませんね」

メロンパンをかじる遊子。確かに、地元の女子高に通っていたときよりも、世間に疎い人間が多い気がする。買い物なんでもカードで払う学生はいなかった気がする。

「おまえはこの学校の生徒選抜基準がなにかわかるか？」

「良家の息がやたら多いことくらいでしょうか？スポーツ特待生や推薦枠にねじ込むくらいに」

「やっぱり、わかるか。不自然だからな」

咲耶姫はブリオッシュをちぎる。手がべたべたするのを気にするようなので、パンと一緒にもらってきた紙ナプキンを差し出す。

「加えて言えば、生徒同士の縁戚関係が多い。全校生徒の名簿を並べればわかるが、西園寺という姓だけでも、全校で三十人いる」

「西園寺、西の方ですか？」

「ああ、お前と同じ臣籍降下された名門だよ。西皇側だが」

国の始祖を祖に持つ、二つの皇族の片割れである。

「ちなみに西園寺はうち二十八人は女生徒だ」

「女系家族だからですか？」

咲耶姫は、指先をナプキンで拭う。

「家督を継ぐのは女だからだ。男なぞ、大体役に立たないからな」

「随分、現代の教えに反する思想ですね」

「それはおまえの家も同じだろう？東雲家では男児が生まれなければ、養子をとるなり婿をとるなりしていたのではないのか？」

遊子はごくんとメロンパンを飲み込む。

「従兄弟を婿にする案がでてましたね。どうしようもない奴なので、婿も養子案も却下されましたけど。昨年、弟が生まれましたので問題はひと段落ですが。でなかったら、遠縁に二歳の子がいるので、将来私の弟か息子にされるはずだったでしょう」

他人事のように遊子は喋る。現代では理解しがたい考えなのだろうが、遊子はそのように育ってきたため違和感はなかった。

「それはうちも同じだよ」

咲耶姫も同じ境遇なのだろう。国単位が存在であるぶん、束縛は遊子よりも深いのだろう。

「うちはひいじいさんの代で内紛が起きたから、より切迫してるんだわな」

半世紀以上前の話である。東皇家の男子の多くが病で早逝する時期があった。公には流行病となっているが、姫のいうとおり『内紛』が真実であるという見解もある。

直系の男子が数えるほどとなったため、血を絶やさぬために古い時代に分かれた始祖の血を継ぐ男子をあつめる必要ができた。

「家を絶やさぬために、古い血縁を集める必要があった。そこで考えられたのが、この学校だったわけだ」

同じ理由で西皇家もまた協力してきた。ゆえに、全国から名門の子女が集められることになる。ごくたまに、庶民も混じっているが、

「いわば、ジーンバンクですか」

血が絶えぬよう代わりになるものを用意する。浅く広く集めるのは、近親相姦のリスクを減らすことにもつながる。

「そのとおりだ。ゆえに、一般人の入学は偏差値を無駄にあげることで調整している。まあ、それだけ優秀なのは大体、妾たちみたいなのがつばをつけているがな」

「それは、迷惑な話ですね」

一般入試組の遊子としては複雑な気持ちだった。

（ん？あれ？）

遊子は頭の中で何かが引つ掛かり、それを姫に質問した。

「じゃあ、私が入試に受かったのは？」

「ああ、それなら安心しろ。おまえの実力だ。まあ、一応推薦枠はあけておいたんだが」

「よく調べられていると思ったんですが、入学前から知っていたということですか？男子ならともかく私に利用価値はないと思われるが」

おまえが男であれば。散々、親類から言われてきた言葉である。まあ、わかつていたことだが気持ちのいいものではない。それを責めるほどでもないのであるが。

「それはな、総一郎だよ。あいつが多少なりとも、あの化け物が見えるってわかったからな。見える、見えないは遺伝要因が大きい」
「それで私なのですか」

遊子の母と総一郎の母は縁戚だという。総一郎の父は彼が生まれる前になくなった。遊子の母の言葉で総一郎たちは住み込みで東雲家に働くことになった。

「総一郎の母方は西皇の血筋らしいな」
「ええ、巫女としての力がない家だと名をはく奪されたと聞きます。『西荻』から『荻』となったと。長い間、『祭妃』を輩出できなかったので。母もその流れですから話に聞いておりました」

祭妃というのは、次代の西皇を生む女性たちのことを言う。西皇に女の子が生まれぬ場合、祭妃から生まれた子を養子にだす形となる。

父親はいない、それは神に仕える巫女である。父は神ということになる。

母は、力の強さから祭妃にという話もあったらしいが、すでに東

雲の家に嫁いだ後だったという。

「西は個体差が大きいからな。親から子、元の血が薄まれば力も弱ろう。また、逆もしかり」

母もおばさんも自分と同じように見えざる者が見えていた。巫女としての力はどれほど必要かわからないが、護身用の小柄を作るだけの力は持っている。テレビに出ている色物霊媒師とはくらべるべくもならない。

「東雲家の長子でありながら、西皇の血筋を汲んでいるとは。妾としては都合がよいのだ」

権力者の目だと遊子は思った。黒曜の瞳がきらめいている。

学園の運営に両皇家がからんでいうとすれば、なにかしらの派閥争いがあるのだろう。そして、それはどのように繰り広げられているかといえば。

「この学園を作ったとき、もうひとつ利点があった理由はわかるか？」

さあ？と遊子は首を振る。

「西皇の血筋は殊更、魔を呼びやすい。それを餌に東皇の血筋が魔を叩く。それが古代のまつりごとだった」

「マツリごと……」

「今は『祭』と『政』に二分されたそれを、学校という場で再現する。風が吹き溜まり、毒にならぬように」

「そのために、姫は」

姫は食べ終わった殻を紙袋に詰める。

「妾たちの仕事の断片くらいは理解できたか？」

遊子は無言のまま頷くと、時計を見た。次の授業に間に合うには走るかなさそうだった。

六 赤城司郎

第一理科室にけだるそうな咲耶姫を引つ張つて滑り込みをしたとき、教室はまだ休み時間の雰囲気醸していた。

「ほら、急ぐことないだろうに。疲れさせおつて」

だるそうに一番うしろの机の端に座る。化学の時間は、六人一班で実験することが多く、遊子は席順からして咲耶姫と同じ班ということになる。

「なんでしょう?」

「うるさいな」

準備室の扉の前で人だかりができている。黄色い声がつるさい、女生徒が固まっていた。

その中心に頭が二つ飛び出している。どうにも見覚えのある面々である。

「これも姫の差し金ですか?」

さして感慨なさに遊子が聞いた。

「乙女ゲーみたいでいいと思ったんだが、だめか?」

可愛らしく上目使いで見る。

「ゲームはやらないのでわかりません」

白衣を着た青年たち、赤城と総一郎は『教育実習生』の名札をつけていた。総一郎にいたっては、眼鏡までかけていた。

「随分ともてていたようではないか」

「滅相ありません、僕には姫がいればよいことですから」

齒が浮くようなセリフを考えるまでもなく口にするのは赤城である。百八十五の長身と端正な顔立ち、それから気安い口調を合わせれば、年上に憧れる女子高生がざわめき立つのも無理ではない。

同じく年上の男性である総一郎も、目つきが悪いことを除けば、スペックは悪くないので物静かなほうがいいという女生徒もいる。かけている眼鏡に反応するフェティシズムを持った女生徒もいた。

おかげで授業中、女生徒は盛り上がり、男子生徒は不機嫌になり、頭の後退した化学教諭は空気になった。

ホームルームを終えてやってきたのは第三視聴覚室だった。ほとんど使われていない開かずの教室の鍵を姫が持っているということはそのようなコネを使ったのだろう。

いつのまにかセバスチャンがおり、どこからともかく持ってきたテーブルをセットし、香しい紅茶を入れていた。

「青柳はどうしていた？」

無口な巨躯の男は大きな胴着入れを担いでいた。

「体育」

と、なぜかガッツポーズを見せる。遊子のごついけどなんだか可愛い人だと思つうようになった。携帯の待ち受けが猫だったのを見てしまったからかもしれない。

「おまえに授業は無理だもんなあ」

赤城が笑いながらしばしと叩く。熊のような男は首の裏をぱりぱりかいている。脳みそ筋肉と言われているのに、怒る様子はない。

「恥ずかしいから無理」

と、顔を赤くする。遊子は彼を見るとやはり森のくまさんを思い出してしまう。

「それにしても、最近の子は大胆だねえ。メルアドーダース獲得しました」

メモやノートの切れ端、単語帳に書かれたアドレスである。ちやっかり沢渡の分も見つけた。

「おまえも俺の半分はもらってただろ？」

肩を抱いてくる赤城を面倒そうに振り払う総一郎。眼鏡はもうかけていない。

「いるならやる」

ポケットからくしゃくしゃになった紙切れ数枚を赤城のアドレスの上に置く。なにげに半ダース以上ある。

「あーあ、これだから。ねえ、遊子ちゃん、昔からこうなわけ？」

遊子に振ってくる。振られても困る。

「さあ、うちにはそれらしいのは連れてこなかったので。うちの父が心配していました」

「親父って遊子ちゃんの？」

赤城が不思議そうな顔をする。

「ええ。父に気に入られているんです。晩酌なんかよく付き合わされてました」

小学生の時から、と伝えたと、

「わあ、未成年がいけないんだー」

茶化す赤城、ノリが大学生らしい。性格が三枚目だと遊子と思う。もしくは、うざい。

「うるさい。遊子もべらべら喋るな」

総一郎は椅子に座って、けだるそうに雑誌を読んでいる。表紙に赤いバイクが載っている。

（相変わらずバイクが好きだな）

以前と変わらない姿を見ると少しうれしかった。

そういえば姫が静かだなと、振り返ると咲耶姫はノートパソコンにヘッドフォンをつけていた。なにを見ているのかとのぞいてみると、遊子に理解しがたい二次元の世界が広がっていた。いわば大きなおともだち向けのものである。

「遊子ちゃん」

赤城が慰めるような声で肩を叩く。

「誰しも残念な部分の一つや二つあるんだよ」

「ああ、なんとなくわかりました」

遊子の青ざめた顔に気付いたのか、咲耶姫はヘッドフォンをはずし、

「駄弁りは終わったのか？おまいら」

あくまで麗しき容姿の勇ましき声の姫であるが、手に持った耳当てから鼻にかかる声が聞こえていた。

「姫、それはアウトです」

「そうかあ？おまえも見たらはまるだろうに」

「遠慮します」

はまったらはまっただ、怖いのでと赤城は一步後ろに下がった。

「最近、怪しげな場所を見繕った。二手に分かれて様子を見てきてくれ」

姫がそれだけ伝えると渡したのはモバイルパソコンだった。

そんなこんなで、遊子は赤城とともに行動している。無口な青柳、遊子がいることを疎ましく思っている総一郎を考えてみれば、妥当な組み合わせだろう。

「姫の話によればあそこらへんのかな？」

赤城は、部室棟を指した。今現在、赤城と遊子のいる場所は、立ち入り禁止の芸術棟の屋上である。いうまでもなく、コネを使って鍵は開けてある。

「俺にはさっぱりなんだけど、遊子ちゃんわかる？ 見えないなら、双眼鏡貸すけど」

「レンズ越したと、そのものが変質して見えます。カメラで心靈写真が撮れるのと同じ原理です」

遊子は手すりに乗りかかり、言われたあたりを見回す。

赤城にも見鬼の才はあるのだが、遊子に比べるとかなり小さいようだ。

「濃度は少し濃いですが、まだ大丈夫だと思います。おそらく大会前のぴりぴりした空気に澱んでいるだけです。出るとすれば、野球部あたりでしょうか。マウンドも濁っているようなので」

率直に答えると、赤城は感心したように口笛を吹いた。

「疑うわけじゃないけど、本当に見えるんだね」

赤城はモバイルパソコンを取り出すと、画面を立ち上げた。黒っぽい画面に赤や青、緑の波が浮いている。

「サーモグラフィですか？」

「まあ、似たようなもんかな。遊子ちゃんのいうとおり、野球部部屋とマウンドの部分の色が濃い」

指先で画面をいじると、分布図は半分の大きさになり隣にその場所の映像が映りだされる。

「昔よくあったよね、心霊現象を検証するテレビ。まさか、同じことしてるとは思われないわな」

「これって、学校のいたところにあるんですか？」

「プライバシーの関係してるところは、細かい映像はないけどね」

遊子が何を言いたいのかわかったらしい。ばつの悪そうな顔をする。

「ええ。あんまり学校のトイレには行かないようにします」

思春期女子としては、かなり冷静な反応である。人によっては裁判沙汰にしかねない案件であるのに。

「実は寮にもあるんだよね」

大変申し訳なさそうな顔をする。

遊子のがっくり肩を落とす。

「さいですか。それにしても、今更ながらお金持ちですね、うちの学校」

「事情のわかる親は、むしろ寄付してくれるんだよね」

「事情？」

赤城はモバイルを閉じると、肩にかけた鞆に入れた。

「子供がかどわかしに遭うくらいなら、いくらでも金を払うだろうさ」

「かどわかし……」

「ああ、神隠しともいうかな？海外だと取り換え子、いやこれはちよつと違うか」

「……取り換え子」

遊子は、小さくうつむいた。

「この学園の生徒は、極端にそういう傾向のものが多からね」

血筋からだろうね、と赤城はいった。

なぜだか、皮肉げに笑っている。

赤城は屋上の扉を開けると、

「遊子ちゃん、行こうか」

遊子はぼんやりと校庭を眺めたままだった。

「遊子ちゃん！」

「あつ、すみません」

「どしたの？」

赤城は、ぼんやりした女の子を見る。

「どしたの？」

もう一度たずねると、

「なんでもないです。すみません」

遊子は速足で赤城について行った。

「いつもこんなことやっているんですか？」

次の場所は大学の経済学部だった。外車で構内に乗りつけるような、経済という観念に疎そうな生徒しかいないのは皮肉だろうか。

「予兆があるときだね。私服も似合うね」

大学構内で制服は目立つので、スラックスにシャツを着ている。母親の見立てのシャツは、無駄にフリルがついているので、好みではない。しかし、言われて嫌じゃない物言いをするのがこの赤城という青年だった。

「面倒だけど、こういうことするしかないんだよ。最小限の被害に抑えるためにね」

購買前のベンチに座りモバイルを開く。

「俺たちには力がない、それを補うには早めに芽をつむしかないんだ」

「力ですか」

遊子の見た赤城たちの力はいしたものだと思ったのだが。

「俺も青柳も見ることが少しできるだけだよ。木月は少し違うみたいだけど、大差はない。道具を使ってようやくダメージを与えるに過ぎない」

「そつえば、刀に水をかけてましたね」

「お浄めの水だよ。咲耶姫的に言えば、物理無効化の敵に属性付与で被ダメージってところ」

「申し訳ないのですが、よく意味がわかりません」

とりあえず、あの刀や水がなければ化け物は倒すことはできないということでのいのだらう。遊子の小柄と同じように。

丁寧の説明してくれる赤城を怪訝な目で見た。

「どしたの？なんかついてる？」

首を傾げて甘く微笑みかけてかけてくる。異性をドキリとさせる仕草であるが、遊子は無反応で少し残念そうな顔をした。

「いえ、姫も赤城さんもよくしゃべるなと思って」

「はは、姫も俺もおしゃべりだからね」

「そういう意味ではなく、出会ってほんの数日の私に込み入った事情を話すのは不用意ではないかという意味です」

いかにも現実主義な考え方である。

赤城は小さくため息をつくと、

「それは、俺たちが君のことをもつと疑うべきだと考えているのかい？」

「その通りですね。姫君については私も実家に問い合わせて、本物だと認証してから、契約書にはサインしました。内容のなかに、いうまでもなく黙秘事項は入っております」

「それでも、もう少し、慎重に話せていること？」

「気を付けていて杞憂ということはないと思います」

モバイル画面の温度変化をのぞきこむ。

「なるほど。女の子が駄目なおひいさまが気に入るわけだ」

「嫌いなんですか？」

「好きじゃないと思うよ。感情論でものを話すからね、遊子ちゃんみたく例外もいるけど。ちなみに二次元は別腹」

（二次元って）

なにかしら突っ込みたいところだが、遊子は口に出かけた質問をださなかった。なんとなくスルーしたほうがよさそうだったためだ。

「さあて、駄弁りはよして次に行こうか？」

パソコンを閉じると腰を上げる。

遊子もあとに続こうとすると、耳の後ろでちりちりした感覚がした。振り返ると、なにやらものすごく嫌な感覚がした。

「あっち」

遊子が校舎の反対側を指さした。

ぬるく重く濁った空気が動いていた。

赤城の顔がみるみる青ざめていく。どうやら彼の目にも可視できる状態まで進んでいるらしい。

「嫌だなあ、遊子ちゃん。ほんと目がいいんだから」

と、携帯電話の短縮を押し、モバイルをしまった鞆から、細長い小包を取り出す。

「悪いけど、お片付けしないとね。遊子ちゃんは後ろで待機しててね」

さわやかな笑みを浮かべ、小包を遊子に渡した。

遊子は額をおさえながら、蠢く空気の流れに目をこらした。

（化け物なら化け物らしくしろよ）

赤城には、まだはつきり見えていないのが幸이었다。

衛星電話の着信をきると、総一郎は苦虫をつぶした顔をした。

「つくしよ」

総一郎は持っていたモバイルを青柳に押し付け、バイクに跨る。中等部の構内から大学の構内まで二キロはある。

「おっ、おい！」

電話を受けていない青柳は全く意味が分からずうつろたえていた。

「早く乗れ。あっちででたんだとよ」

「お、おっ」

青柳が跨ると、アクセルを入れた。

七 本質（前書き）

キャラに感情移入する方は、ブラウザバックをお願いします。

七 本質

なぜ、こんなところにいるのかわからなかった。いつもどおり、学校から帰っていたはずなのに。

建物の形を見ると、病院か学校のように見えた。たぶん、大学というものだろうか。

オープンキャンパスで見たところに雰囲気がよく似ている。

なんだか、身体がふわふわして気持ち悪かった。

どうにかして、足をうまくつこうとするが、自分の身体が自分のものでないようで動きづらい。

どうしたものだろうか、と周りを見る。

知らない場所だが、ずっとここにいるのも意味がないのでふらふらと歩いていく。

なんだかとてもお腹がすく。

さつき、コンビニで間食したばかりだと思ったのだけど。うろうつろとなにかないか探す。

すると、なんだかとても良い匂いがしてきた。

甘い甘い、糖蜜のような匂いがする。

本能に逆らえず、匂いのもとへと身体が動く。

地面を滑るように歩く自分は、まるで爬虫類かなにかにでもなった気分になった。不思議と、身体が蛇行するように動いている気がする。

おいしそうな匂い。

そこにあっただのは、食べ物でなく、鬱屈^{うっくつ}とした青年だった。目がどんよりとしている。

どうしたのだろうか、不思議と手が伸びていた。見ず知らずの青年に、こうして接触するなど、普段の自分には考えられなかった。

あれ、と触れた途端、お腹の中が少しだけ膨れた気がした。

鬱々とした青年が、触れたことに気がつかないのをいいことにもう一つ手をのせる。

甘い蜜が舌の上を撫でるような感覚がした。

なんでだろう、青年は気づかない。それとも、気づかないふりをしているのだろうか。

自分のやっていることが、とてもはしたない真似だと思うが、本能には逆らえなかった。

青年の背中に枝垂^{した}れかかり、その首筋に舌をはわせた。

とてもおいしかった。

甘く濃厚でお腹を満たしてくれる。

ありがとう、と青年に伝えたかったが、青年は自分の言葉に耳を傾けようとしていない。

それでも、これだけ密着した自分をはねのけようともしないのだから、問題ないのだろうと、食事続けることにした。

これが、青年との出会いだった。

青年は悩みを抱えているらしく、中庭に来てはぶつぶつと独り言をもらしている。

ここにも、問題はないだろうかと考えたが、そういうときの青年はとてもおいしくて離れようにも離れられない。

きっと、悩みを聞いてもらいたいのかもしれない、そう自分に都合のよい理由をつけて一緒にいた。

彼の悩みはどんどん深くなっていく、なにもできない自分がもどかしいが、どんどん彼がおいしくなっていくのと思うと、もっとおいしくならないかなとひどいことが頭に浮かぶようになった。

自分が嫌だと思ったけれど、一度食べた甘露は忘れられず、おなかいっぱいになるまですった。

蜜月はずっと続くかと思われたのに、自分と彼を引き裂こうとするものが現れた。

いつものように、鬱屈な青年に密着し、食事をしていたところだった。

すると、全身が総毛立つような気持ち悪さが辺りに広がっていた。わけがわからず、青年にすがりつく。不気味で気持ち悪くて

こわい、こわい、と震えるしかない。

近づいてくる男は、優しげな顔をしていたが、なんだか気持ち悪かった。

片手に持つ小包からとても気持ち悪い空気が流れている。

近づかないで、ねえ、どこかへ行こうよ、と青年にすがりつく。青年は、焦点のさだまらない眼を近づいてくる男に向けていた。

にこやかな青年は、ポケットからなにやら小瓶を取り出す。蓋をとると、いきなり中身をふりかけた。

硫酸かなにかだろうが、触れた部分がじゅわじゅわと焼けただれていく。痛い、熱い、どうにかして、と青年にすがりつく。

ぎゅっとしがみついたせいだろうか、青年の声に呻きが混じる。ごめんなさい、と腕をゆるめようとする、笑顔のまま男が自分と青年の身体をはなそうとする。男の手に先ほどの液体がふりかけてあるらしい、触れた部分が熱く火傷の痕を残す。

どうしていじめるのか、わからなかった。

ただ、お腹がすいてさびしくて、だから、一緒にいたいだけだといふのに。

くやしくて腕を振り上げて地面を叩くと、激しい地響きがおこった。

わけがわからず、周りを見渡すと、男の他に女の子がひとり呆然と立っていた。

手には、なんだか嫌な感じのする小包を持っていたが、どうでも

よかった。

女の子の顔は、なんだか憐れむようなさびしそうな顔をしていた。青年ほどではないにしろ、なんだかおいしそうに見えた。

身体をひねり、女の子のほうへと近づいていく。

女の子はただ、呆然と立っていた。これは、自分を受け入れてくれると肯定してよいのだろうか。

いただきます、と女の子に触れようとしたとき、視界が急に変わった。

あれ、つと首を動かそうにも自由に動かない。

視線は空を舞い、校舎を過ぎ、衝撃とともに芝生が広がった。

太刀を持った男がそこにいた。

先ほどの笑顔の男とは違う、目つきの悪い、機嫌の悪そうな男だ。

銃刀法違反だ、と考えてしまう。

なんであんなものを持っているのだろうか。

不思議に思ったが、答えはその場に落ちていた。

ああ、そうか、と。

自分がなぜ、あるとき、見ず知らずの場所にいたのか。

学校帰り、道草を食いながら家路についていたはずなのに。

寄り道しなければよかったなあ、などと今頃反省しても遅かった。でなければ、信号無視のバイクにはねられたりしなかったのに。

よほど、スピードを出していたのだろうか。
身体が勢いよく吹っ飛ばされ、そして、運の悪いことに、頭をひどく打ち付ける着地をしてしまった。

胴体と首が離れたことで、ようやく気が付いたことがある。

あんな身体をしていたのだと。

蛇の身体に無数の脚の生えた奇妙なもの。

あれでは、たしかに化け物だと。

なぜだか笑えてきて、ゆっくり目を瞑った。

○●○

「安請け合いはよせといっただろ」

総一郎は、刀を鞘に収めると、遊子を見た。

遊子は目の前で、繰り広げられた惨劇に目を細めるしかなかった。きっと、総一郎以外の二人、赤城も青柳も、先日あかぎ あおやぎの化け物と同じように、異形のものに見えたのだろう。

大蛇に百足の脚がはえたかのようなそれに。

しかし、遊子の目にはそれに折り重なるように、自分とさほど変わらない少女の姿がうつりこんでいた。

自分がどのような姿になったのかもわからず、青年にすぎるよう

に憑りついていてた。それは助けをもとめた姿だったのか、それとも単純に食事の相手としてだろうか、どちらでもよい。相手の精神を蝕んでいくのにも気づかずにいるのだろうか。

黒く霧散する塊には、何が起きたのかわからない少女の頭が横たわっていた。

遊子は目が良い。

すなわち、見なくてもよいものを見てしまうことをいう。

総一郎らに罪悪感はない。

それを止める理由はない。

それを統括する咲耶姫に至っては、化け物自体見えないのだから。

自分にできるのは、見ることだけ。

話しかけることも、話を聞くこともできない。

たとえ、できたとしても彼女に何をするのができようか。食事をやめてくれというのか。餓死をすすめることなどできようもない。

化け物となった少女は、すでにひとでなく、この世のものでないのだから。

この場にあり続けること自体が、よど澱みを生む原因であり、それを放置するわけにはいかないのだから。

あのまま、総一郎が飛び出さなければ、遊子は手に持った小包を開いて使っただろうか。

そつと風呂敷を開くと、白木の短刀が入っていた。
母親からもらった小柄こづかの代わりだろう。

（本当に甘ちゃんだな）

沢渡に憑りついた化け物なら、躊躇なく首を狙うのに。

本質は変わらない、ただ、その割合が違うだけで。あの昆虫のような化け物は、あまりにいろんなものが混じり過ぎて、人間らしい欠片もなかった。きっと、先ほどの蛇の化け物も、時間がたてば似たようなものになっていただろう。

その差異は、遊子にとって大きかった。

（同情してはいけないか）

母もまた、同じように見てきたのだろうか。

そして、なにもできずに手をこまねいていたのだろうか。

「もう遅いけどな」

遊子はぽつりとこぼすと、消えゆく少女の生首から目をそらした。

八 祖父

「そっちはあぶないよ」

小さな声が聞こえる。自分の袖を引っ張る幼馴染は不安な顔を全面に出していた。

「だいじょぶだろ、行こうぜ」

何をそんなに怖がっているのだろう。全然わからない。

外はいつもの森で、いつもどおり遊びにいくだけだ。今日は少しだけ霧がでているけど、まだ明るくて道に迷うこともないはずだ。臆病な奴だ。

「そっちはだめだ」

二つ年下の少年は立ち止まって動かない。

「離せよ」

つかんだ手を払いのけ、少年を置いて奥へと進む。

「だめだよ、行っちゃ」

「お前だけで帰れよ」

少年を置いて走る。どうせ、後からついてくるだろう。いつもそうなんだから。

霧はだんだん濃くなるけど、気にすることはない。

いつもどおり遊んでくるだけなんだ。

いつもどおり。

いつもどおり。

寝汗がじつとりと寝間着にしみこんでいる。

（やな夢見た）

乱れた寝間着がわりの浴衣を直し、冷蔵庫を開ける。オレンジジュースを取ると口に含んだ。

（なんか苦い）

紙パックを戻すと、気を取り直してミネラルウォーターを口に含む。

寝台の縁に座り、前髪をかき上げる。こめかみにまで、汗がにじんでいる。

「ああ、きもちわるい」

少年のような口ぶりで遊子^{あそびこ}はつぶやいた。

「どうした？電話なんかずっと見て」

「いえ、なんでもありません」

遊子は携帯電話をポケットにしまうと、和食定食をつつく。煮物は少し甘い、海老しんじょのお吸い物は美味しかった。贅沢をいえば、醤油は薄口にしてもらいたいのだが、やはり地域が違うので無理だろうか。

今日は雨だったので、昼食は食堂でとることにした。

遊子だけならば、ごった返す昼時の食堂に行こうとは思わない。だが、輝く黒目がちの目で、「かつ丼、食べたい」と、咲耶姫さくやに言われようものなら、頷うなづくしかなかった。

極端にB級にあこがれる姫は、心底楽しそうだった。

購買で一度、がっかりを味わっていた咲耶姫は、どんぶりに半熟卵でとじられたカツと玉ねぎを見るなり、楽しそうに身体をくねらせた。それよりも、ワンコインでおつりのくる価格に驚いていたが、支払方法が学生証を使ったカード形式なので肩がぐんと下がった。

東都学園自治区内では、基本、学生証をクレジットカード代わりに使うようにされている。表向きは、未成年者の多い東都自治区で、不適切なことに現金が利用されないためということだ。以前、薬物が自治区内でさばかれていたことがあったらしく、その防止も含めている。

まあ、それもあるだろうが、実際は、学園中にある監視カメラと一緒に、生徒の動向を探るためだと遊子は思った。

学生証の利用履歴を見れば、どんなことをしたのか予想はつくし、財布代わりのものなら私服でも肌身は外さず扱うだろう。それを観測すれば、自治区内のどこにいるのかすぐにわかる。

なるほど、実家が東都学園なら、寮生活を許したわけであった。

この学校に、プライバシーなどという言葉はないのだ。

東都学園では、一般入試組と言われる、比較的、健全な経済観念を持つ生徒たちもいるため、かつ井といった比較的安価なメニューが多数ある。一部の心無いものたちに「豚のえさ」などと揶揄^{やゆ}されているが、それをやんごとなき姫君がおいしそうに食べているので、周りは不思議そうに見ている。

真似して、食べるのはよいが、本来、必要な人間のぶんもなくなるらないか心配である。

値段は安価だが、材料は他のものと変わらないものを使っているらしく、カツは箸ですんなり切れたようだ。最悪、具材を細切れにする必要があるかな、とナイフとフォークと小皿を用意していたのだが、杞憂にすぎなかったらしい。

遊子はまだ一度、ポケットの中に入れた携帯電話を取り出したが、着信の気配はなかった。

ここ二週間、祖父からの定期連絡は途絶えていた。

「はい、いつもどおりです。あつ、ちょっとお聞きしたいことが」

夜の母の定期連絡のついでに、祖父のことを聞く。

「特に何もありませんか。わかりました」

祖父はいつもと変わらず仕事をしているらしい。

父に権限の多くを渡したとはいえ、東雲しのめの当主として、グループの会長として暇というわけではない。

よく考えれば、入学してから毎日、遊子のもとへ電話をかけてきていたほうがおかしいのだ。弟が生まれた今、遊子に跡取りの意味はないのだから。

母が、咲耶姫と一緒にいるときに電話をするのは失礼だと、遠慮しているのかもしれないと言ってくれたので、そのように思うことにした。深く考えても仕方ない。

不思議なものだ、煩わわづしかった監視が少しでもゆるくなると、途端に不安になる。

まるで、自分がそれすら必要のない人間になったような錯覚におちいる。

きつと、遊子が生まれたときも同じように思っていたのだろう。

眼も開かぬ、生まれたばかりの赤子に、家には必要のない生き物として見ていたのだろう。

でなければ、父にあれほどしつこく愛人を困こまつようにすすめたりはすまい。弟が生まれるまで、どれだけ母が焦燥せうそうにかられたのかわからない。

いつそ父も煮え切らない顔で母と祖父を見比べるくらいなら、さ

っさと二号さんを作ってしまったえばよかったのに、と遊子は思う。芸者遊びの延長だといえば、母も怒りはするが許してくれるだろう。男とはそういうものだど理解しているはずだから。そういう家だとわかって嫁いできたのだ。

携帯電話を充電器につなげると、珍しく遊子はテレビをつけることにした。気分転換に、なんでもいいから気を紛らわすものがほしかった。

電源を入れるどころか、コンセントを入れたのも初めてのような気がする。

いきなり、初期設定画面が広がり、遊子は首をひねった。唇を尖らせながら、テレビ棚の下を覗き込んで、取扱説明書を探す。ビニール袋に入ったままのそれをとると、中身を確認する。

遊子は目次を開いて初期設定のページを見ること数秒、絨毯が敷き詰められた床に、取説を投げつけた。

（明日、ラウンジに運び出そう）

いらぬ長物だ。

遊子が充電する携帯電話は、若者向けの多機能のそれではなく、高齢者向けのシンプルなものである。

華美なものを嫌う傾向は、電化製品の機能にまでおよんでいた。

けして、機械音痴ではない。

いつもどおり、教室に早く到着すると、珍しくクラスメイトたちが話しかけてきた。

「咲耶姫ってどういうひと？」

とのことである。

本人に直接聞けばいいといったら、顔を見合わせて笑いあう。

「そんなことできるわけじゃない」

咲耶姫が転校してきて半月、ようやく遊子を介して接触を試みようとしているようだ、先は長そうだ。

西の皇に比べ、東の皇はまだ人間として扱われるくらいがあるが、それでも雲の上の人間らしい。

（話せば、俗っぽいことがわかるのに）

見た目が完璧だけに、まことに残念なことだ。

遊子が適当にあしらっていると、咲耶姫が現れる。

楚々とした雰囲気^{ムツク}に皆がゆっくり頭を垂れる姿に、遊子は形だけでも真似することにした。

「咲耶姫」

「ん、どした？」

携帯端末をいじりながら、姫が答える。中身はいつもどおり、遊子の理解しがたい二次元のものだった。

周りには生徒はほとんどいない。

授業は五時限目で終わって、ホームルームも終わっている。教室は、清掃会社が入っているので、生徒はしなくてよい。

教室の四隅にはいつも盛り塩がされてある。これも、咲耶姫の指示で業者が行っているのだろう。

学園内が外に比べて、澱みが少ない理由である。

「いえ、なんでもありません」

「ものすごく、気になる言い方をするの。おまえは」

祖父のことを姫に聞いても意味がないだろうと、遊子は言つのをやめたのだが、ぐいぐい近づいてくる姫には勝てそうにない。

「なんだ。それなら、普通に自分から連絡すればよいだろ」

至極、あっさりともっともな返答をくれた。

遊子にだってそのくらいわかってる。

「それができたら、苦労はしません」

「そうだろうな。うちもそうだしな」

互いに複雑な家庭事情のため息をついた。

なんだか、人付き合いの下手な自分が、なぜ付き合いづらい人間のはずの咲耶姫に慣れてしまった理由がわかった気がした。

○●○

「あつちはあぶないよ」

幼馴染の袖を引っ張る。精いっぱい声をだしたつもりなのに、かすめるような声しかでない。

「だいじょぶだろ、行こうぜ」

怖がる理由のわからない幼馴染は、勝気な顔で奥へと進んでいく。霧が深くかった森には、この世ならざるものたちが漂っていた。自分にだけ見えてしまうことが、もどかしい、なぜ、わかってくれないのだ。

「そっちはだめだ」

足がすくんで動かない。

それ以上、奥にいつてはいけない。

「離せよ」

つかんだ手を払いのけ、自分を置いて奥へと進む。

「だめだよ、行っちゃ」

「お前だけで帰れよ」

自分を置いて走る。いつも通り追いかけることもできない。恐ろしい魔物の顎あぎとに自分から身をゆだねることはできなかった。ただ、臆病だった。

恐ろしくて、恐ろしくて。

のちに、これを後悔した。

取り返しのつかないことになった。

こうして、二つ年上の幼馴染はいなくなった。

ひどい寝汗をかきながら、総一郎そういちろうは、寝台から起き上がった。

悪い夢を見た。

忘れようにも忘れられない、取り返しのつかない過去の夢を。

幼い総一郎を責める大人は誰もいなかった。

ほんの五つの子どもよりも、動向を見守っていなかった女中の責任のほう为重かった。

それでも、自分の罪悪感が消えるはずもなく、そして、忘れることも許されず、時折、ああして夢の中で繰り返す。

「畜生」

総一郎は拳を壁に打ち付ける。

十六年経った今も、自分の無力さにふがいなさに、情けなくなってくる。力をつけるために、何でも、誰であろうとも利用しようと思っただのに。

それなのに。

「なんで、あいつまでここに来るんだ」

立てた膝に額をのせて、つぶやいた。

九 東皇三兄弟

久しぶりだな、と咲耶さくやは思った。

咲耶は二人の兄弟たちと対面していた。

細面の丹精な顔をした長兄、葛城かつらぎ。切れ長の目はどこことなく、誰かに似ている気がする。

ちよくちよく会う三つ上の健は、相変わらず傾奇者かぶきものといった風貌で、着流しに虎の毛皮を巻いていた。まさに新鋭歌舞伎といった常識を逸脱した格好である。耳にはもう穴のあける隙間がないほどピアスで埋め尽くされている。注射も嫌いな咲耶には考えられない行為である。

回転テーブルを挟み、中華料理をいただいている。老舗ホテルの最上階に位置するここは、政治屋が内緒話をするのにうってつけな場所だった。

西の皇族はひとに近い神だといわれているが、東の皇族は神に近いひとといわれる。西のものに言われるには『俗物』、誰よりもひとらしい、政治屋の血族である。

今回は、そういう意味であつまったわけではないが、皇族が三人も集まるといろいろ面倒なことになる。兄弟で駄弁だべんすることにも、気をつかわなくてはいけないとは、面倒な話だ。

「変わらないようだな」

落ち着いた長兄は、料理に手を付けることなく紹興酒しょうじゅうを味わって

いる。

「まあね、俺はね。娘はすげー大きくなったぞ。はいはいもできるぞ」

十か月の娘を持つ健はでれでれの顔で娘の写真を携帯で見せてくる。今は兄弟水入らずということで席を外しているが、伴侶とその娘も同じホテル内で待っていることだろう。

それにしても、一児の親とは思えぬ態度である。子どもが子どもを生んだ、育てたとはこのことだろう。

「タケルのせいで妾はもうおばさんなんだぞ。菊理は可愛いが、もうちよつと遅く生まれてもよかったのに」

「いうな、いうな。生まれちまったもんは、でけたもんはしょうがねえんだ。素直に受け入れろや」

三兄弟の真ん中は、信じられないほどアバウトにできている。その性格・容姿で周りの評判はすこぶる悪いが、それでもものうのと生きているしたたかさを生来持ち合わせていた。

政治にはまったく興味はないが、アパレル業の真似事などやっている。本人のファッションセンスから想像できないが、けっこう真つ当な和服ブランドである。二十歳にもならぬ若造がそんなものを立ち上げる資金はあるのかといえ、まあ、父にねだったのだろう。

「菊理は最近、『まー』とか『ぱー』とかいうんだ。どっちが先に呼ばれるか、音橘おんたちばなと競ってんだよ」

ぜってー勝つ、と拳を振り上げる。

まるで小学生のようだと、咲耶は思う。実際は、普通の小学生と

はどういうものか知らないわけだが。

「あにぎみも大変だの」

音橘とは健の配偶者であり、東皇の血筋であることから、咲耶と同じく姫と呼ばれている。傾奇者の健皇子と夫婦とは信じられない大和撫子である。世の中、どう転ぶかわからない。

咲耶はふかひれをレンジですくいする。せつかなのでチャイナ服を着てくれば良かったと、スリットの入った給仕のおねえさんを見て思う。

土産に買っていこうかと、にやりと笑う。

「元気でなによりだ」

がつがつと品がないくらい食べる健皇子に比べ、葛城皇子は箸ひとつつけていない。

咲耶は珍しく菜箸なこばしをとると、

「兄君、なにかとりますか？」

と、らしくない気遣いを見せた。本当にらしくない。

給仕の女性はあらかじめ下げしており、料理を自分でとるなどあまりやったことがない。普段なら、周りの人間がやってくれる仕事だった。

「いや、私はこれで」

小さな杯に酒を手ずから注ぐ。

「おう、酢豚とつてくれ」

と、かわりに健が皿をだす。

「まだ、食べる気か」

咲耶は呆れ顔で、酢豚を椀に山盛り入れてやった。嬉しそうに受け取る健だったが、具にパイナップルが入っているのに気づくと露骨に嫌な顔をした。

「好き嫌いはだめだぞ」

意地悪な顔をしてにやりと笑う。葛城も健も咲耶も三人とも似ていない。皆、同母から生まれているはずなのに、である。しかし、性格の悪そうな歪んだ笑みは健と咲耶はよく似ていた。

「つで、学校はどうなんだ？珍しいじゃねえの。ちゃんと通うなんて」

にやにやと健皇子が笑う。

「失敬だな。社会勉強のためだよ。家庭教師だけでは、知識が固まってしまうだろう？」

「ああ、引きこもりから抜け出してくれて、俺はうれしいよ」

と、パイナップルを小皿に避ける。

「友達はできたのか？」

「できるとしたら、可愛い部下だな」

「うわー、なんだよ。その新しい玩具ゲームでも手に入れた顔は」

と、言いつつ本人も楽しそうである。

主に、二番目と三番目の相手をからかい合うような会話は、しばらく続いた。

長兄だけは、その話を肴さかなにちびちびと酒を飲んでいた。

○●○

（あの子も見えるのか）

遊子ゆずは、廊下の隅の澱みを見る女生徒を見る。どの程度はつきり見えているのかわからないが、ぼんやりと変なものがあるという感覚だろうか。でなければ、目を向けようとも思わないだろう。

眼の良い遊子には、脳髓のうずいの飛び出た生首が転がっているように見えるのだから。

女生徒が首を傾げながら通り過ぎると、ポケットから小瓶を取り出し、中の液体をこぼす。液体は霊峰の湧水と清めた塩を混ぜたものである。

じゅわじゅわと嫌な音をたてながら、哀れな迷ひ神のかけらは消えていく。

（慣れたくないものだな）

子どもが蟻の巣を掘り返すような、そんな気分になってくる。

母から聞いた話では、迷ひ神とは神さまの国へ行きそこなつた神さまということらしい。現世うつしよから常世とこよへと帰りたいがため、常世に行きたいと願う人間に憑くという。そんな人間の発する気は、常世の気と似て非なるもので、だから、迷ひ神はそれを食らい、異形のものへと変化するのだという。

簡単にいえば、成仏できない幽霊がずっとこの世にいますと、ものすごい悪霊になりますよ、とのこと。

ときにそれは、実体化ではなく、ひとの身体をも乗っ取るから厄介である。

遊子ユウジは、カーディガン越しに己の身体をぎゅっとつかむ。

（もどかしいな）

遊子には見ることしかできない。
それしかできない。

先日から何度か、実体化しかかった迷ひ神の討伐にかり出された。しかし、遊子の仕事といえば、後衛で見守ることくらいである。他の三人に比べて、体力差は歴然であり、近づくだけ邪魔になるのだ。

（これじゃあ、なんのためにこの学校に来たんだ？）

わざわざ、一般入試を受けてまで東都学園に来た理由は、どうしたのだ。

折角、唯一の手がかりを見つけたのだというのに。

焦る気持ちを押さえこみ、また校舎内を見まわる。

誰かに憑りつく前に、消えてもらうのが一番簡単な方法なのだから。

少しでも、咲耶姫の信頼を得るために。

遊子が総一郎の言葉を押し切り、咲耶姫の手伝いをするにしたら理由はそれだった。

咲耶姫が遊子を利用するのと同じように、遊子もまた咲耶姫を利用しようと考えていたからだ。

賢い姫は、そんなこと重々承知であろう。

役に立てば、それ相応の対価を払ってくれるだろう。現在、支払われているバイト代の他に、情報というエサもくれるかもしれない。

遊子は学生証を入れたカードケースを取り出す。ケースの奥に、古びた写真が一枚入っている。

折り目のつき、色あせはじめたそれには、二人の少年が肩を組んでいた。ひとりは腕白だが古風な人形のような顔立ちで、もうひとりはそれより年少の三白眼のこどもだった。

写真の日付は、遊子の生まれる前になっている。

（絶対、探し出してやる）

遊子はカードケースを胸ポケットにしまつと、また小瓶を取り出す。

澱みのもとに一滴かけると、じゅわじゅわと音をたてて蒸発した。

寮に戻ると、実家から荷物が届いていた。

箱の中は容易に中身が想像できる。開けると案の定、それであった。

遊子の趣味に合わないフリルのついたワンピースに、コサージュ付のアンサンブル、ロングスカートだけは無地なので着れないことはなさそうだ。

しかし、予想外に小振袖が入っていたのは笑うしかなかった。小振袖ということで、少しは父が妥協したのだろう。実家ならともかく、ここで着るような場面といえば、茶道部の部活動くらいだろうか。

残念なことに、帯がないため、着用は無理である。どこか抜けている、それが父の人間らしいところだった。

もうひとつ男物の着流しが入っており、おばさんの手紙が入っていた。実家にいたころは、遊子も総一郎も和服を着用する機会が多かった。遊子は今でも、寝間着として浴衣を着用している。

どうやら、親不孝な三白眼男は、自分の下宿先も母親に伝えてないらしい。

遊子は着流しを畳紙たたしに包みなおすと、他のものとは分けて置く。

一番下に、桐の箱が入っている。

開けてみると、いつも使っている小柄こづかと同じものが二本、それと漆塗りの鞘に入った懐剣が入っていた。

一緒に入っていた手紙を読むと、流れるような筆跡で気遣いの言葉が書かれていた。

遊子は手紙を読み終えると、ふらふらと寝台に倒れこんだ。

毎日、電話で話しているというのに、食事の心配や健康状態、夏休みはいつ帰ってくるのかと書かれていた。

（今を楽しく生きなさい、ですか）

見透かしたような母の筆跡に、遊子は乾いた笑いを浮かべた。

（それができたら、やっているよ）

「木月きつきなら、修練場にいるよ」

赤城あかぎに礼を言って、遊子は言われた場所に向かう。

姫君に呼び出され、今日は屋敷にいる。週末だから、皆で食事をしたという、姫君らしい理由からだった。

古風な洋館の出で立ちをした咲耶姫さくやの居住は、和洋折衷わようせっちゅうな作りをしている。

大きな門から庭、館までは洋風であるのに、その裏側になるとなぜか平屋の道場と露天風呂がある不可思議さだ。

おそらく、洋館自体は移築したものだろうが、奥の和風建築物はあとから付け加えたのだろう。

老執事が屋敷内を案内するときに、大変不服そうにそれらを見ていたことから、やはり趣味が悪いと思っっているのだろう。

遊子としては、風呂が和風呂のほうが好きなのでいつでも入ってよいといわれたときは喜んだが、もれなく姫君も入るという特典付きなので、今のところ遠慮させてもらっている。

寮で共同風呂は慣れているわけなのだが、それとこれは別なのだ。

白壁の平屋の中に入ると、袴をつけた総一郎が片膝をついていた。刀をはき、流れる動きで刀剣を抜き放つ。

総一郎は、遊子の存在に気が付いたらしく、眉間にしわを寄せると、ゆっくり刀を鞘におさめた。

「なんのようだ」

冷たい幼馴染の声に、遊子は持ってきた紙袋を差し出す。

「おばさんにくらい連絡先教えとけ」

総一郎はそれで大体理解したらしく、刀を細長いアタツシユケースに入れる。指紋認証の鍵をかけると、それを持ち、遊子のもとに近づく。

道着とはいえ、和服姿の総一郎は久しぶりに見た。よく父にすごかれていたのを思い出す。総一郎は居合の型が崩れるたびに殴られていたが、遊子にはそれがうらやましくてたまらなかった。遊子は、道場に足を踏み入れることさえ許されていなかったのだ。入口の外

からぼうつと眺めることしかできなかった。

時代錯誤な家であった。

今も、そのときのくせだろうか。入口の鴨居かもいをくぐることなくその場にいる。

おかげで、護身術を習う際も、つい空手や合気道といったものを避けてしまい、少し変わったものを選んでしまう羽目になった。

（私もなにか稽古をつけてもらったほうがいいか？）

高等部に入学してから、それまで通っていたものはすっぱりやめている。

最近、筋トレを始めるようにしたが、柔らかくなった二の腕をもとに戻すのにも時間がかかるだろう。

紙袋を受け取ると総一郎は礼もなく、横を通り過ぎる。
汗の匂いが鼻につく。

「風呂入っておけよ」

「わあってる」

「案外、仲よさげじゃないか」

声をかけてきたのは、赤城だった。

「なんか用か？」

総一郎は、不機嫌な顔をさらにゆがめている。

「いえね、遊子ちゃんに教えた手前、おまえがここにいなかったら悪いかなって、見にきたわけだよ」

「ちゃんとしてよかったな」

総一郎は、そのまま、奥の浴場のほうへと向かった。

無愛想な背中が見えなくなると、赤城はやれやれと首を振った。

「気を遣わせてすみません」

「へえ、遊子ちゃんって、なんか木月と喋ってるって勇ましい口調になるよね。普段は、丁寧な言葉づかいなのに」

「そうでしょうか」

遊子はなんとなく目をそらしながら答える。

「ところで、本当は何か用でもあったのでは」

話をかえるように、赤城に聞いた。

「ああ、姫が帰ってきたよ。夕食まで時間あるし、遊子ちゃん、相手してあげてくれない？俺、明日、レポート提出なんだよ」

赤城もまた、大学部に通う生徒である。高等部の偏差値を考えると、大学部もそれなりに難しいことになるのだろう。

「大変ですね」

「うん。内容はともかく、提出枚数が半端ないからね」

苦笑まじりに指を三本立てる。レポート用紙三十枚分ということ

だろうか。

遊子は赤城とともに、姫の待つ広間へと向かった。

十 迷家

遊子^{ゆうす}は目の前で広げられる狩りを淡々と見ていた。

一方的に、ダメージを与えるだけの闘いなど、狩りというほかになんというだろうか。

無数にのびた腕を半分以上斬りおとされたその化け物は、三つの口から咆哮を、七つの目から涙をこぼしていた。

どう見ても人外のものであるそれを、総一郎たちは憎々しげに見ていた。たとえ、パーツだけでも、人間と同じものを使われると、戦意というものはだいぶそがれるらしい。

それでも、咲耶姫^{さくや}の私兵たちは、無駄のない動きで迷ひ神を削っていく。

無傷で戦闘を終わらせる、そのように総一郎たちは訓練を受けているようだ。

周りには、補佐をするものたちもいる。総一郎たちのように原始的な武器、つまり刀や槍ではなく、銃のようなものを抱えている。物理的な攻撃方法のきかない化け物には、清めた水を詰めた弾を撃ち込むようだ。が、生憎、そういうものは相性が悪いらしい。お浄めの水の能力を半減させてしまうし、なによりスコープ越しだと対象がぶれて見えるだろう。

いつそ清めた水を全身に浴びせるように降らせるのが、一番簡単な方法であるが、それは難しいという。水は貴重であり、大量に作

れず、なにより核を狙わねば消えてなくなるらない。

原始的な攻撃方法しかきかないというのは、迷ひ神退治における命題なのかもしれない。

遊子は、倒れた少女を膝にのせる。目にくまのできた少女は、先ほどまで宿主として憑りつかれていたものだった。

学生証を見ると「西倉田」と書かれてある。西の血族だろう。

（神隠しを防ぐためか）

以前、赤城^{あかぎ}の言っていた言葉を思い出した。

なぜ、これほどまでこの学園に、迷ひ神が多いのか。

（呼び寄せる血筋が多いから仕方ないか）

遊子もまた、その一人に違いないだろう。

見えるということは、関心を持ち、持たれる。そして、心の影にすまわれるのだ。

自然災害のようなものと遊子は思う。

被害を減らすことはできても、完全になくすことはできない。

「つまらんなあ。夏休みとやらは」

期末テストの成績結果を広げながら、姫君はだらしなく机に突っ伏している。

「だらしなですよ」

遊子は、及第点にとどかなかった数学の点数に目を細める。補習にでる必要はないが、これを実家に送ったら、お小言とはいわずとも、顔をしかめることだろう。

（やっぱり中学とは違うな）

暗記物の量は格段に増え、数学になるとまったく新しい概念を入れ込まれて、それを理解するので一苦労する。応用に至るのは難しい。

学校側の学習計画では、一年目で数学は数？・A、？・Bを終わらせるらしい。センター試験で出てくる基本問題は、初めの年で終わらせる計画である。

二年以降は、大学受験を意識した応用と選択科目を中心にやるという。形だけは、しっかり進学校である。

咲耶姫は少し不貞腐^{ふて}れている。理由は、遊子が夏休みに実家に帰ることを伝えたためだ。

暇なことを嫌う姫君は、それ以外にも案外さみしがり屋だったりする。可愛いなあと、思ったりしたが口には出さない。

下手に甘い顔をする、調子にのって何をされるかわからない。先日はなぜか、服をひんむかれ、無理やりチャイナドレスを着せられて、お揃いとかいわれて記念撮影された。

それにしても、着せ替えの途中に胸をもむ行為になんの意味があ

るのだろうか。やめていただきたい。

（恥ずかしくて死にたくなつた）

デジカメのデータは、咲耶姫のパソコンに入っているが、遊子にはそれを消すべがわからなかった。いつか不慮の事故を装い、物理的に破壊しなければならない。

「ついていこうかな？」

「別にいいですけど」

父ならむしろ歓迎するに違いない。だが、田んぼと酒造所しかないど田舎なので、なにも面白みはないだろうが。

「ネットは？」

「ありますけど、電話回線です」

「無理」

咲耶姫はうなったあと、やっぱりいいと、首を振った。

やっぱり、と遊子も頷く。

気を取り直した咲耶姫は、携帯端末で新作ゲームの発売日を調べているようである。やはり、遊子には理解しがたい世界のものである。

（土産とやらは、どういうものを買えばよいのだ？）

一般的なものは、饅頭だのクッキーだのと言われたが、舌が肥えた実家のものに量産品を買ってきてもおいしくないだろうし、だからとて、怪しげな彫り物細工も邪魔になるだけである。ペナントを買えと、咲耶姫に言われたが、言うまでもなく却下だ。

名産は山葵わさびなので、新鮮なものなら文句は言われまいと、学校近くのショッピングモールではなく、昔ながらの門前町にやってきた。

赤い柱と石灯籠が並び、敷き詰められた石畳が雰囲気醸し出している。入った瞬間、神々しいような感覚さえした。

少々、寂れた雰囲気さえも趣おもむきとさえ感じられる。

周りにいるのが地元の間人ばかりだからだろうか。

学校内やショッピングモールのように、目がちりちりするほど気持ちの悪い澱みよどみはない。

ただ、周りの人間はそれほど明るい顔をしていない。

遊子には、趣とさえ思う寂れ具合だが、それは商いを営む本人たちには深刻な問題だろう。

学校近くの商店が繁盛していれば、自然とそれ以外の客も吸い取ることとなる。

客層が違ふことは救いかもしれないが、逆を言えば、学園の生徒は客にならないともいえる。

遊子は横目でどんな店があるのか見ながら何を買おうかと悩む。一応、観光地としての体裁は崩れておらず、荷物が増えても宅配できるのが助かった。

クレジット替わりの学生証もちゃんと使えるようになっていく。

とりあえず店のおばさんがすすめるまま、大量の漬物をクール便で送る羽目になった。先日も下着店に行ったら、すすめられるまま何組も買ってしまったので、どうやら押しに弱いらしい。

（黙っていれば、イエスとされるのか）

無駄に長いレシートをごみ箱に捨てる。景觀を保つためにごみ箱を置かない観光地は多いと聞くが、ここは木枠で無難に目隠しされていた。

（そのうち、上にも行ってみるか）

門前町の奥には、長い石階段が続いており、山の上には社が奉^{やまつ}られている。

西に多い、イキガミ信仰の分社だという。

用事は済み、店のおばさんの笑顔が作り物から本物に変わったので、門前町を出ようとしたが。

遠足は帰りつくまでが遠足だ、と咲耶姫に耳元で言われた気分になった。

街中でまったく見られなかった澱みが、吹き溜まりのごとく固まっていた。粘菌のようなゲル状のそれは無数の眼球が付いており、そのすべてと目が合ってしまったらどうすればよいだろうか。

（懐刀持って来ればよかったかな）

持ってきてても役に立つかわからないが、お浄めの水が三本

と小柄^{こづか}が二本、自分の身の丈よりも大きなものに対するには、心もとなさ過ぎた。

遊子が走り出すと同時に、化け物も流れるように追いかけてくる。

ようやく見つけたごちそうを逃がす気はないらしい。

（アメーバならゾルゲル運動でもしてろよ）

物理法則を無視した摩擦を感じさせない動きに、遊子がとらわれるのは幾何^{いくばく}もかからなかった。触れた瞬間、肌に浸透する感覚がする。遊子は、小瓶をあけると、水をためらいなくふりかける。

蒸発する音が耳につく。

（能動的すぎるだろ）

本来の迷ひ神は、このような動きはしないはずだ。

その場にとどまり、手ごろな人間が近づくことでようやく憑りつかうとするものである。

しかし、この化け物は、餌を絶たれて久しい獣のような勢いを持っている。

異質である。

虎の子の聖水も、丸一本使ったところで消えてくれない。むしろ、

怒りを買った気がする。

物理化はほとんどないので町の人間には無害だったのだろう。しかし、遊子のような人間には、十分危険な存在だった。

身体を浸透し、内側から乗っ取られる感覚がした。手首に触れたあの気持ち悪い感覚を打ち消すため、小柄で傷をつける。血のにじむあとから、なにかが蒸発して消えていった。

（どうすればいいか）

脇と背中、そして首の裏から汗がにじむ。

無力な自分には何もできない。

むしろ、見えることがあだとなっている。

手持ちの駒がない以上、逃げるよりほかなかった。
ていきい
体裁など考える余裕などない。

あのすばい動きから、学園まで逃げることは不可能だろう。そう考えると、目にうつったのは高台に見える社だった。

（あそこまで逃げ切れるかな？）

門前町を突き抜けるよりも、林の中を突き抜けたほうがはやそうだ。障害物が多いが、ショートカットを優先する。

小柄を二本とも口にくわえ、蓋をとった小瓶を親指で栓をして両手に持つ。そのまま、社の階段に向かって走り抜ける。

計画的に植林されたそこは、思ったより足場が悪くなく走るのに苦労はなかった。しかし、木をすり抜けながら近づいてくる化け物にすぐに追いつかれ、そのたびに、持った小瓶からしずくを振りかける。

じゅわじゅわと耳触りな音を無視し、懸命に走る。それを数回繰り返したところで、目の前に赤い鳥居と石階段が見えた。

残り少なくなった小瓶をそのまま化け物に投げつけると、全力疾走する。激しい息切れと心臓が壊れるような心拍数を感じながら手を伸ばす。

ふと、頭にネガティブなことがよぎった。

（御社に来たところで、何の意味もなかったら？）

その一瞬、遊子の足が止まったのだろうか、それとも、おいしそうな匂いに化け物が反応したのだろうか。
もつれる足に、何かが浸透してきた。

（まずい）

身体がバランスを崩し、そのまま前のめりに倒れこむ。

その瞬間、指先が鳥居の柱に触れていた。

まぶしい光とともに、遊子は気を失った。

「あーあ、こんなところに紛れ込むなんてね」

おどけるような少年の声がした。

眼をあけると、ぼさぼさの白髪の少年が顔を覗き込んでいた。あずき色の作務衣を着て、腕を組んでいる。見た目は中学生くらいだろうが、声はまだ半端に高い。

「おう、おはよ」

遊子は、目をぱちくりさせながら、つられるように、

「おはよう」

と、いった。

目の前には、見たこともない天井が見えていた。仰向けに横になっ
っているらしい。

混乱する頭をおさえながら、ゆっくり身を起こす。

周りを見ると、見たこともない部屋にいる。燦いぶしがかった板張りに、
趣のある柱に土壁、家具もアンティークを思わせる箆たんす笥が階段状に
並べられていた。

近代を思わせる古い造りの部屋に、遊子は懐かしさをおぼえた。

少年は、水屋に置かれた植木鉢をとる。苺のような苗が植えてあるが、その実は不可思議にも銀紙のようなものに包まれた球体をし

ていた。自然発生したようには到底見えない。

「どうぞ」

少年から、奇妙な果実を受け取る。

（なにこれ？）

外側はやはり銀紙のようで、中身は苺味のチョコだった。昔、こっそり食べた駄菓子の味に似ている。

でも、葉や茎の部分もついており、これは植物のものとは思えない。

いったいどうなっているのか。

「世の中、不思議なことはたくさんあるよ」

見透かすかのように、少年は言った。

「ここは、たまに君みたいなのが迷い込んでくるのさ。まあ、僕としては、いい迷惑なんだけど、ばいばい追い出すわけにもいかないからね。相方に叱られる」

「それは、すみません」

チョコを全部食べ終わると、とりあえずごみはポケットの中に入る。

「も、ひとついかが？」

「今は結構です」

「そりゃ残念」

少年は、チヨコの実を自分の口に入れる。

（たしかに、町の中で迷ひ神にあつて）

「安心してよ。化け物はいないからさ」

また、心を読んだかのように少年は答える、

（サトリか？）

「失敬な。妖怪扱いしないでくれよ。人間だよ、人間。ただ、少し性質が違っただけさ」

やはり、妖怪だと思いながら、遊子は少年を見る。

ついでに、なんで自分がここにいいのかと、疑問を頭に浮かべてみる。

「なんていうのかな。ここの大家おおやなんだけど、そいつの作った結界に触れたみたいだね。化け物は結界に入れずに溜まっついて、そこに君が出くわした。逃げる中、化け物は結界に弾き飛ばされ、君は保護される形で吸い込まれた。まあ、たまにあることなんだけど、どっちみち結果オーライで問題ないよね」

詳しく聞きたいところだけど、少年はいちいち説明が面倒だという顔をしている。聞いたところで謎が増えそうな気がするだけなので、話はこらで折っておいたほうがよいのかもしれない。

少年は、物わかりのよい客人に愛想よく笑っている。

「そのほうがいいよ。君はことは相性が良いみたいだから、早く出て行ったほうがいい。せっかく安定しているその身体がぐらつくのはよくないだろ?」

遊子は驚愕を顔に浮かべて少年を見た。

なにか口にしたそうとしたところで、少年が人差し指を口の前で立てる。

「ただいまー。誰かいないのー?」

間延びした女性の声が聞こえる。玄関のほうから、ぺたぺたと足音がする。

この家の住人のようである。

「相方なら別にいいんだけど、あっちにつかまると、長居させられてしまうからね。面倒くさいことになる前に、帰ってもらおうかな。縁があればまた会えるだろうし」

と、少年が遊子の前に手をかざす。

すると、目の前が真っ白になり、まぶしくて目を瞑ってしまった。

「あれ?君つてもしかして?」

少年は何かを言っていたが、最後まで聞き取れなかった。

足元がぐらついた感覚がして、平衡感覚がなくなった気がして、そして、時間の経過すらわからなくなった。

（いったい、なんだったのだ？）

白昼夢でも見ている気分になった。

目をあけると、そこは先ほどの門前町だった。

鳥居と灯籠の並ぶ、趣深い商店街である。

ぼんやりした頭をこすりつつ、ふととにかく気が付いた。
ポケットに手を入れると、丸い銀紙にくるまれた実がそこにあった。

（たしか、ごみしか入れてないのに）

いぶかしみつつ、また、銀紙をはがし中身を口に入れる。苺味の
チョコレートが口に広がる。

また、ごみをポケットに入れると、一度手をだし、また取り出す。
すると、ごみはまた、もとのチョコの実に戻っていた。

（似たような昔話、聞いたことあったな）

迷った旅人を持てなす屋敷、そして、土産にもらったものはいくら使ってもなくならない。

「迷い家まよですか」

東に伝わる奇談を思い出し、くすつと笑った。

（不思議には慣れたつもりでいたんだけどな）

奇妙な手土産を指先でもてあそびながら、遊子は寮に帰ることにした。

少年の最後の言葉は、すっかり頭から消えていた。

十一 東雲家

クローバ―マークのついた指定席に座ると、隣には無愛想な面が座っていた。

「奇遇だな」

「そうでもない」

むっとりした顔で腕組みをして、足を組んでいる。

遊子は邪魔だと、足をのけると窓際に座った。

「電車くらい一人で乗れると、言ってくれないか？」

「駅員は迷惑していたようだがな」

遊子は言いよどむ。三回ほど、駅員に道を案内してもらった。見ていたのなら、連れてってくればよいものを。

「タクシーまで嫌な顔されたくないだろ」

ちなみにいまだ、カーナビには遊子の実家付近の道はうつらない。住所だけでたどり着く場所ではない。

人里離れたというわけではないが、地元民でないとうまく説明できない場所にある。駅から運転手にうまく説明して、無事つける自信は正直なかった。

学園に入学した時は、母と乳母がわりの総一郎そういちろうの母と一緒に来てくれた。新幹線にのるまでは、車で送ってもらってきた。

迎えに行くという母の言葉を遊子が断ったため、こうして総一郎

をお目付けにやったのだろう。用意周到である。

「ちゃんと、おばさんには連絡したみたいだな」

総一郎はむすつとした顔で、背もたれを倒すと、アイマスクをして眠り始めた。まだ、帰省ラッシュは始まっていないらしく、グリーン車はがら空きだった。

（憎らしい奴だ）

先ほど買った駅弁についていたシールをはがし、貼り付けてやる。なんだか、咲耶姫さくやに感化されてきた気がしないわけでもない。

遊子も同じように背もたれを倒すと、ぼんやりと窓の外を見た。山と田畑と町並みの繰り返しに、いつのまにか眠っていた。

新幹線を降り、タクシーに乗ること三十分、ようやく実家に到着した。

時代劇に出てくるような武家屋敷、機能性の乏しい我が家である。

「おかえりなさいませ」

「おかえりなさい」

割烹着姿のお手伝いと母が出迎えてくれた。母の腕には、まだ幼い弟がきやつきゃ笑っていた。

「ごめんな。バイトがあつたつちやる」
「いいえ。問題ありません」

母は、結婚して二十年以上、いまだ変わりなく訛^{なま}った言葉を使う。かなり西のほうの方言だ。死んだ祖母に何度もなおせといわれたらしいが、結局、なおさなかったのだ。

総一郎は、母に頭を下げる。

母におばさんの場所を聞くと、奥へと入って行った。

「ただいま」

「おかえり。なんか、汚れとるね。楔^{みそぎ}しとく？」
「うん」

頭をはらうように撫でる母に、遊子はこくりと頷いた。

白装束を身に付け、ゆつくりとつま先から泉に入る。

透き通った湧水は冷たく、夏の外気の中でも震えを感じさせた。

苔むした岩に足を滑らせないように気をつけながら、腰まで水につかる。

澱^{よど}んだ空気が、水に清められていくような感覚がする。

母が楔をすすめるときは、いつも身体に悪い空気を纏っていたときだった。そんなときは、真冬でも冷たい湧水につからねばならなかった。

（けっこう汚れてたんだな）

目に見えない澱んだものを、水で流していると、上からなにか音がする。羊歯したの生えた岩壁の上を見ると、懐かしい顔が堂々とのぞいていた。

「秋人兄あきて、危ないですよ」

「よう、久しぶり」

奔放な従兄いとこ殿を仰ぐ。以前は、本当に兄になるか、それとも旦那になるかという話のあった元婚約者だ。

見た目はホスト崩れだが、中身もホスト崩れである。祖父の大事にしていた水墨画のコレクションを蔵から持ち出し売り払ったことで出入り禁止をくらったはずだ。

「おじい様に怒られますよ」

「今日は、いねーから大丈夫。それよか、遊子ゆうこ、金、貸し……」

言い終わる前に、ごんつと鈍い音が聞こえ、目を見開いた秋人がそのまま岩壁の向こう側に落ちていった。

「どうしたんだ？」

壁の向こうは柔らかい地面になっているので、落ちても問題はないだろうが。けっこう丈夫なひとなので無視しておくことにする。

遊子は、襖を終えると、白装束から着替えることにした。

コットンブラウスとロングスカートに着替えると、なぜか総一郎が秋人を引きずっていた。

秋人は暴れていたが非力なので、鍛えられた総一郎に歯が立たない。負け犬のごとく、「この居候」とか「むつつり」とか「ロリコン」とか叫んでいる。なぜかよくわからないが、総一郎はよくロリコン呼ばわりされている。

「何しているの？」

遊子は秋人の手前、女性的な言葉を選んでたずねる。

「のぞき魔の捕獲」

そういえばのぞかれていたことに遊子は気づき、助けを求める秋人を見殺しにすることにした。白装束を着ていたとはいえ、水にぬれば透けるので、見られて気持ちのいいものではない。

どうせ、助けたとしても金の無心に来ただけだろうし、勝手に家探しされるのも困るので仕方がない。

憎めない性格をしているが、人間として致命的に駄目なので困ったものである。

「おい、遊子」

襟首をつかまれ、猫の子のようにひっぱりあげられている秋人がいった。

「探し人見つかったか？」

その言葉に、総一郎は鋭い目をぎらつかせ、秋人の鳩尾みぞおちに拳を見舞った。口の減らない従兄は、ようやく黙ってくれた。

「秋人になにいわれたか知らないが、こいつの話を鵜呑みにするのは馬鹿のやることだぞ」

「なんのことかな」

遊子は、口調を戻すと自室へと向かった。

「まだ、見つからないよ」

二人が見えなくなったところでぽつりとこぼす。

秋人もまた、東都学園卒業者である。大学部まで行っていないが、中高と六年間通っていた。

その男が、去年の冬に言ったのは、

「生きてたら、あんな風になってたかもな」

と、という言葉だった。

数年前、たった一度、学園内で話したことのある男子生徒の話をした。切れ長で古風な顔立ちをした左腕のぎこちない青年の話だ。名前も、学年もわからない、人懐っこい秋人がたまたま話しかけた人物だった。

先祖代々の写真が並ぶ中、ひとつだけ幼い遺影が壁にかけてあった。まだ七つの子どもだった写真を懐かしそうに見ながら、さみしそうに笑っていた。

まあ、この後、蔵に入り家探しをして、祖父の雷を受けたわけだが。

遊子は他愛もないこの言葉で、進学先をかえることにした。針の先ほどの、どこまで信じていいのかわからないその言葉で。

遊子はふと、足を止める。

ふすまを開けると、二十畳の座敷が広がっている。床の間には、祖父のお気に入り焼物と掛け軸が飾られている。祖霊舎が祀^{まつ}られ、壁には遺影がかけられている。一番端にかけられているのは、遊子によく似た切れ長の目をした少年だった。

東雲真人^{まひと}、本来の東雲家の長子は、この写真の人物だった。

遊子が帰ってくるということで、珍しく父が早く帰ってきていた。いつもなら、平日であれば別宅に泊まり、週末にしか帰ってこないひとである。ど田舎にあるため、会社の通勤に不便なのだ。先日、たまたま電話にでていたのも、咲耶姫^{さくや}の連絡があったからだろう。

かわりに祖父は帰ってこない。父の数倍輪にかけて頭の固いひとである。たかだか、孫娘のために仕事を切り上げる真似などしないのだろう。

先日まで、毎日、電話をかけて監視していたものとは思えなかった。むしろ、それまでのことが異常だったのかもしれない。

おかげで夕食は、比較的和やかなものになった。

五年ぶりに帰ってきた総一郎に、父は機嫌をよくし、大吟醸を振舞っていた。果物のような芳香で、飲んでいない遊子もできがよいことがわかる。

ちゃっかり秋人が、ご相伴にあずかっていると見ると、父をうまくほだしたのだらう。情に流されやすいところが経営者として不向きだと、いつも祖父に言われている。

遊子の好物の鮎あゆに蓼酢たでが添えられている。こんにゃくのからし味噌田楽に、鰯はものしゃぶしゃぶもある。

肉料理もあるのは、総一郎にも合わせたのだらう。残念なことに、一番喜んでいるのは、秋人だったが。

食事中に会話するのは下品だと言われているが、祖父がいない今、家主の父が話しかけてくるので返事をするしかない。

執拗に聞いてくるが、咲耶姫のことは最低限にとどめておいた。母はちらりと遊子のほうを見るが、すぐ、弟の世話に手を焼いていた。

久しぶりに落ち着いたひと時だった。

その晩、弟を寝かしつけた母のもとに行くと、母は一言だけ言っ

た。

「好きにしたらいいけど、無理せんどいてね」

何を聞くわけでもなく、答えるわけでもない。遊子が頑固な性格だとわかっているからだ。

柔らかい弟の腕を持ち、指先でまじないをなぞる。

きつと、弟が七つになるまで続くのだろう。遊子も同じようにされてきたのだから。

七つのお祝いまでに、神さまにさらわれぬように。

「そんな恰好でいくのか？」

「着物よりましだろう」

遊子は白いワンピースにつばの広い帽子をかぶっていた。地味目の服は、弥生寮に置いてあるので、うちに残っているのは、母の趣味がいかなく発揮された少女趣味なものか、和服かのどちらかである。

手には桶と柄杓を持っている。

総一郎は無言のまま、桶と柄杓を奪い取ると、すたすたと歩いていく。

遊子は歩幅も合わせてくれない幼馴染のあとを、小走りになりな

がらついていった。

蝉のうるさい鳴き声と、遠慮のない総一郎の歩き方のおかげで、身体はぐっしょりと汗まみれになった。

ついた先は、大きな御影石の前で、周りにいくつも同じものが並んでいる。

東雲家の墓は、広大な敷地内にあった。

よく遊子の家は、古めかしい武家屋敷の周りだけだと勘違いされるが、実際はその周りの田畑と裏山、中には民家も含め、いわばひとつの集落が東雲の土地である。住んでいる人間は、酒造所に勤めるものや、その材料を作っているコメ農家がほとんどである。

集団の墓地と違い、定期的に庭師が草むしりをしているので、掃除の必要はない。総一郎が汲んできた水を柄杓で墓石にかける。

父に言われ、仕方なくきてみたもののくだらないと遊子と思う。

柄杓の水を腕にかけ、火照った身体を冷やす。

「いつそ、私に水をかけたほうが早いのではないか？」

冗談めかした遊子の言葉に、総一郎は目をきつく細める。

「滅多なことはいうな」

「わかっている」

（誰もいない墓か）

一部のものにしか知られていない真実、『東雲真人』と書かれた墓石の下には、誰もいない。ただ、欠片だけが骨壺に収まっている

だけだった。

帰省は二週間、遊子は何をするわけでもなくのんびりと毎日を過ごした。弟の面倒をみたり、宿題をしたりそんなところだ。一度だけ、取引先の息子と見合いまがいのことをしたのだが、やたら胸元ばかり凝視するので、全員一致で破談となった。

総一郎は、元々長居する気はなかったようだが、父やおばさんに止められ、一週間ほど留まった。おばさんの住んでいるのは、敷地内の別棟で、そこで使っていた部屋はそのままにしてあった。

そのあいだ、祖父が別宅から帰ってくることは一度もなかった。

十二 葛城

（やはり、ここの生徒ではないのか？）

遊子^{ゆうす}は、図書館の資料室に籠もっていた。テーブルにはここ十年分の卒業アルバムが積み上げられている。

入学当初から何度も見直したが、遊子の探す人物はいなかった。行事の写真一枚一枚を見てもそれらしいものはうつりこんでいない。

秋人^{あきひと}は学園祭でかの人物に会ったという。そうならば、部外者の可能性も高いわけだが、東都学園は特殊な場所なので、いくら学園祭で解放しているとはいえ、学園に入ってこられる人間は限られる。

切れそうな蜘蛛の糸をたどるような真似をしなくてはならないのに、その先が絡まっていてはどうにもならない。

咲耶姫^{さくやひめ}には、遊子の探している人物についてもう説明していた。情報にはやい咲耶姫も、首を傾げていたのでわからないのだろう。ただ、興味深そうにやりと人の悪い笑みを浮かべたので、なにかしら調べてくれる可能性はあるかもしれない。

総一郎^{そういちろう}は不機嫌な顔で、遊子をじっと睨んでいた。深追いするなということだろう。

学園の生徒が帰省で減った夏休みは、特にひどい澱^{よど}みはなく、平

穏な毎日だった。

帰省からもどった遊子に待ち受けていたのは、暇を持て余した咲耶姫のお守りだった。

絵に描いたようなバカンスに付き合わされたり、旧校舎を丑三つ時に探検したり、フツの女の子らしくシヨッピングなどと連れまわされたが、まあ特に言及するほどのことはないので端折^{はし}っておく。

遊子は、母と咲耶姫が親子だったら実に円満な関係が築けるだろうと、まだ包装をあけていない箱の山を見て思う。コルセットを模したハイウエストのスカートに、リボン付のフリルブラウス、ガーター装着タイプのストッキングに底の厚いエナメル靴。これは、純和風のしょうゆ顔に対する挑戦であると受け取っていいものか、遊子はそんなことを考えてしまう。

遊子は自室の備え付けの机につくと、重ねられた問題集を開く。ぺらぺらとめくり、全部終わっているか確認する。帰省前に済ませた夏休みの宿題だった。夏期講習に出席できない生徒は、代わりにこれをやることとなっている。

それとは別に、宿題としてあたえられた読書感想文を書かなければならない。課題図書は教科書にのっていたはずなので、適当に書いてしまえば原稿用紙数枚程度すぐに終わるだろうと思っていたのだが、案外難しい。

夏休み残り二日は、四百字詰め原稿用紙とにらみ合うこととなる。

うなりながらシャーペンで頭をかいていると、携帯電話が鳴った。着信は咲耶姫からだ。

「はい、遊子です」

『遅いわ。一秒以内にでろ』

「努力します」

できないこともないが、電化製品があまり好きではない遊子は当たり障りのない言葉を返す。

咲耶姫の無茶ぶりは半分くらい冗談なので流しても問題はない。口にだすと怒られるので言わないが。

「何の用ですか？」

『ああ、言い忘れていたことがあってな』

始業式が終わったたら残っているとのこと。
新学期早々見回りでもするのだろうか。

迷ひ神は周りに餌が多いほど、増加する。夏休みの少なかった分、反動がくるのかもしれない。

遊子は携帯を切ると、机の引き出しをあける。

小柄^{こづか}とともに送られてきた懐刀がある。掃除にきたとき見つかる
と問題なので、引き出しに鍵をかけて保管している。

（念のために持っていくか）

青いちりめんに包まれた刀を忘れないように鞆の奥に押し込んだ。

○
●
○

窓の隙間から朝日がこぼれている。

「おはようございます」

ゆつくりと寝台から起き上がると、服を持った女中が立っていた。
かつらぎ
葛城は、重い身体をゆつくり持ち上げると柱時計を見る。針は八時を回っていた。

いつもより早い時間だった。

病弱な皇子に対し、使用人たちは甘い。成人し、公務をおこなうようになった今でも、時間があれば睡眠にあてるようにしている。

上掛けをかけたまま、さしだされた衣服を受け取る。

女中はゆつくり頭を下げると退室した。衣服を着替え終わるころには、焼き立てパンの香りが部屋に到着しているだろう。

シルクの肌触りを気持ちよく感じながら、袖を通す。右手は袖がちょうどよいが、左腕は肘から先が余っていた。

葛城は左袖をめくると、ナイトテーブルに置かれた箱を開ける。そこには、合成樹脂で作られた精巧な義手が横たわっている。現代科学では、本物と同じように動かせる義手も作られているが、葛城はあえて機能性のないものを愛用していた。

接続部分に違和感を持ちながらつなげると、袖を戻す。指先が動かなくとも、振舞い方次第で気づかれないもので、葛城が義手だと知っているものも屋敷では数えるほどしかない。今しがた、朝食をとりについた女中も、いまだ葛城の左手がないことを知らないだろう。

つか
葛城は椅子に座ると、テーブルの上に置いてある手帳を見る。
そば
側

仕えのすべきスケジュール管理であるが、葛城は自分でやるようにしていた。右手で器用にページをめくる。

女中がワゴンを押して、部屋に入ってきた。香ばしいベーコンの匂いがした。

「今日は何日だったかな」

「八月三十一日です」

朝食をテーブルに並べながら、女中が答える。着替えているほんの数分の間に、半熟のプレーンオムレツとベーコン、コンソメスープにフレンチドレッシングのサラダ、それに焼き立てのパンを用意してくれる。これに、コーヒーはブラックであれば完璧なのだが、健康を気づかってかカフェオレになっている。胃に優しいようにミルクがたっぷり入っている。

食事の準備が整ったところで、手帳を閉じる。

「明日は始業式か」

今日よりも早起しなくてはならないと葛城は思いながら、スーブをすすった。

二十歳で成人し、お披露目も終えた葛城だったが、公務はほとんど行っていない。病弱な皇子に周りが気づかったのことだ。

しかし、いつまでも甘えてばかりでは、民意を損ねることである。形だけでも仕事を与えられる。

東都学園の理事、二十歳そこその青年には荷が重いようだが、形だけとなると椅子に座っていればいいことである。

情けないと思いつつ、己の身体が己のいうことを聞かないのだから仕方なかった。

歯車の合わない時計のように、油の切れた機械のように、葛城の肉体はきしんだ音をたてながら動く。まるで葛城を拒絶しているように。

こんな不出来の兄をもったからであろうか、四つ下の健たけるはすでに結婚し子までもうけている。自分が父のあとを継げないときのために、早く男児を作ろうとしているのだろう。

理事長室のモニターから始業式を眺めながら、自虐的な笑みを浮かべる。三つのモニターには、初等部と中等部と高等部の式が映し出されている。

本来なら、高等部の式に出席すべきだが、人ごみにも酔ってしまふ情けない身体は、生徒に挨拶もろくにできないのだ。まあ、形だけの若造がおもてにでたところで学園側としては面目が立たないだろうから、都合のよい話だろうが。

革張りの椅子にもたれかかり、退屈な学園長の話を聞く。

これが終われば、初等部、中等部、高等部の長と会食せねばならない。相手方は西のお偉いがたなので、ないがしろにはできない。

気の滅入る話だが、その前に引きこもりだった妹に会えるとあらば、少しは頑張れる気がした。会食には咲耶さくやも同席することになっ

ている。

人数もいるということで、咲耶との待ち合わせは高等部の温室となった。大きな鳥かごを模したガラス張りの室内は、色とりどりの小鳥が舞っている。温度調節はまめに行われているらしく、まだ残暑の厳しいこの季節でも快適な空間が維持されていた。

亜熱帯植物が周りに茂る東屋は、小鳥が入らないように施されていた。鳥の糞をふせぐためだろう。

クッションの敷かれたベンチに座り、アイステイーをいただく。

「兄上、待たせました」

からんと氷が形を崩す前に、青年の声をした少女が現れる。いつも着ている装飾過多のドレスではなく、学校指定の制服を着ていた。護衛らしき若い男が三人ともうひとり学生鞆を携えた女生徒がいる。

「珍しいな」

根っからの姫気質の妹は、若い男をはべらす趣味はあっても、同性の友人はできることはないと思っていたのだが。

つい、まじまじと少女を見てしまう。

すらりとした長身で、この季節に長袖のブレザーを着ている。暑苦しい雰囲気は、切れ長の涼しげな眼もとで中和されていた。

葛城の頭に既視感がよぎる。

古風に切りそろえられた黒髪は、日本人形のように、少女もまた葛城をじつと見ている。

きつとお互い同じことを考えているのだろう。
似ていると。

少女は目を見開き、小さく口を動かした。
放心したような、がらんどうの目をしていた。

鞆からなにか細長いものを取り出すと、葛城のもとに近づいてくる。布に包まれたなにかを持っている。

「……せ」

ぱくぱくと動かしていた口から、その言葉を聞くと、少女は布から懐刀を取り出すと己のほうに向かって襲い掛かった。

誰もが予想しなかった行動だったが、そのなかでひとりだけ、少女の反応に追いついたものがいた。

「どうして……」

苦々しく言葉をもらす少女の持つ短刀には、赤いしずくが伝っていた。しずくのもとは、少女と葛城に割り込むように入っていた。目つきの悪い青年がいた。脇腹に短刀の切っ先がめり込み、左手で少女の手を押さえこんでいる。

「なんで邪魔をする？」

「おまえはそんなことをしなくてもいいんだ」

泣き出しそうな少女はゆっくりと刀から手をはなす。

青年は脂汗をかいてその場に座り込む。

葛城付の護衛たちが少女を取り押さえる。両手をねじ込まれ、顔を地面になすりつけられている。女子どもなど関係なく、皇族に刃を向けたのだから。

「どういうことだ」

咲耶もまた混乱していた。

取り押さえられる少女と刺された青年を交互に見ていた。

なぜ、少女がこのような行動にうつったのか。

それがわかるのは、きっと己と少女と、そしてあの刺された青年の三人だけだろう。おのれ

護衛に促されるまま、葛城は車へと向かう。

会食は中止だろうか。

頭はずっとさえていた。

そんなことを考える程度に。

『私の身体を返せ』

少女は確かにこういった。

ああ、なるほど、そういうことが、
通りで使い難い身体のはずだ。

昔、行きずりの少年から奪ったのだった。
本当の肉体を失ったばかりのころに。健康な、同じ年頃の子ども
から。

名前をなんといったらうか。

たしか、少年の祖父らしき老人が言っていた。

「……真人^{まひと}」

傍流の血を継ぐ老人は、強張る唇でそうつぶいでいた。

右手には少女と同じように刀を持っていた。孫であったものの血
を刃先に垂らしながら。

すでに魂のないはずの肉体を冥府に送るために、心の臓を貫くつ
もりだったのだろうが、愛着というものはそう簡単にぬぐえるもの
ではない。

左腕を失った真人だった肉体を連れて帰った。
葛城として再び生きるために。

「なんだ、そういうことか」

その昔、自分の犯した大罪に葛城は皮肉な笑みを浮かべていた。他人事のように思えるのは、ずっと忘れていたせいだろうか。

少女があのような言葉を吐くということは、彼女もまた、誰かの肉体を奪ったのだろう。

酷い話だ。返せなど、言える立場ではなかるうに。自分も略奪者だとわかつているのだろうか。

漏れる笑い声に、周りの護衛たちが怪訝な目を向ける。その怪訝な視線はだんだん、強張っていき、なぜか未知のものに遭遇したかのような顔を向ける。

『どうした？』

自分の声が二重に聞こえる。

身体のきしみがひどくなる。まるで、身体の中に違うものが巣くっついて、孵化しようと内側から食い破られるような感覚がする。

「かつ、らぎ、さま……」

サングラスの奥から明らかに恐怖の色が見える。黒服のがたいの良い男が、情けない声を上げるなどと、最近のボディガードは質が落ちたものだった。

なんだか、車の中が狭苦しい。

広い車体が自慢なのに息苦しくて仕方がない。
このままでは、窒息してしまう。

「でる」

葛城は車のドアを開ける。走行中に開いたドアは、隣の車体に当たり耳触りな音をたてたが気にしない。

身を乗り出すと、そのまま身体を風にまかせてみた。

いつのまにか人間のそれとは違うものに变化していた四肢は、ゆつくり風を受けると空へと舞いあがらせてくれた。鳥というより、蝙蝠こつもりに近い翼をしている。

半分しかない左の翼は、物理法則とは違ったもので身体を浮かせているらしい。

最初からこうすればよかった。

ぎこちなく動いていた身体が、自由に羽ばたいている。

こうして、完全な迷ひ神が生まれた。

十三 真人

一体どれだけ歩いただろう。

深い霧に覆われた森は、自分の視界と平衡感覚を狂わせるには十分で、同じところを何度も回っていた。

総一郎そういちろうは帰ってしまったし、このまま戻るのも癪だと進んでしまったのが間違いだった。

真人まひとは、木を背もたれに座り込む。

つまらなかった。

母は妹が生まれるからといって部屋に籠もりきりで、おばさんもそれに付き従っている。出産は産婆を呼んで自宅で行うのが習わしだった。

せっかく誕生日なのに誰も祝ってくれない。

七つの祝いは特別だと母がいったことなのに。

左腕を見る。

指先でまじないをなぞる。見よう見まねで書いたそれは、母のなぞる紋様とは全く違う。

昨日まで毎日やっていたことだが、産気づいて今日はやってもらっていない。

七つになるまで毎日やれといわれていたことだ。

子どもは七つになるまで神さまのものだから。
返さなくてもいいように、まじないを唱えていたのに。

（赤ちゃんはずるい）

不貞腐れて唇をとがらせていると、ふと背筋が寒くなった。
まだ、八月も半ばだというのに。

なんだかものすごく気持ち悪くなって、早く家に帰ろうと立とうとするが、身体が自由に動かない。

両肩に何かがずっしりのしかかり、身体を押さえこんでいるようだ。

（なにかいるのか？）

真人にはわからなかった。母やおばさん、それに総一郎ならなに見えるのだろうが、真人にそれらしい能力はない。父も祖父も何も見えない、東雲しのめの男子の血は、見えざるものをまったく感知できないのだ。

なにかが、身体の中に入り込もうとしている。

気持ち悪くて動こうとするが、動けない。

涙目になりながら、そこにあるなにかにあがこうとするが、なんの意味も持たない。

入り込むなにかに押されるように、自分という殻から真人のなにかが抜けていく。

俯瞰ふかんするように、己の身体が見えたとき、それに張り付くなにか

がようやくみることができた。

少年、眼窩の落ちこんだ病弱な子どもが今まさに真人の身体を奪おうとしていた。

（やめろ）

糸の切れた肉体に、少年は入り込み、口を開く。

「いやだ」

それは、先ほどまで真人として発していた声だった。

それなのに、自分はここにいるのに、違うなにかが自分の身体を使っている。

真人だった自分は何にもすることができず、ただ、その壊れた口ボットのような動きをする少年が去るのを見ることができなかった。

叫ぼうにも、あがこうにも、それを行う肉体を奪われてしまった。

真人は真人でなくなった。

なすすべもなく漂うしかなかった。

冷たく固い感触を頬に感じる。

上下のまつげが涙で張り付いている。瞼をゆっくりあけると、そ

こはあまり趣味のよい場所ではなかった。

鉄格子がはめられたそこは、以前、老執事が眉をひそめて案内してくれた場所だった。古い洋館をそのまま移築したとはいえ、拷問部屋付とはいささか趣味を疑ってしまう。さすがに、それらしい道具はないが、壁に鎖と鉄枷がついたままである。

遊子^{ゆうす}はそれにつながれているわけではなかったが、ご丁寧に手錠だけははめられていた。

ゆっくり身体を起こすと、目の前に知らない奇妙な人物が座っていた。

「よお。いいご身分だな」

和服に虎の毛皮を腰に巻いた奇妙な少年が顎を背もたれにのせて座っていた。逆立った髪といい、耳に大量にあけられたピアスといい、服装といい、一般常識をかけ離れたセンスをしていた。

少年は椅子から立つと、遊子の前にきた。鉄格子越しに遊子の髪をつかみ、空いた拳で殴りつける。

鉄格子が邪魔をして威力をそがれているが、鼻骨に衝撃を与えるには十分で、ぬるりとした感触と鉄の味が口に広がる。

「おまえ、兄貴になんの恨みがあんだ？」

石畳に遊子の顔を押さえつけ、高圧的に言ってくる。

（兄貴か）

それでは、この少年は咲耶姫さくまひめの兄弟ということになるのか。声の甲高さから弟だろうか。体格は遊子と変わらないくらいである。

護衛に縛り上げられ、牢に押し込められ、一方的に殴りつけられる。

（そりゃ仕方ないか）

皇族に刃を向けたのに、このような処置で済んでいるのが不思議である。警吏けいりに引き渡さず、こうしているのは咲耶姫の計らいだろうか。

両手を雪駄せったで踏みつけられる。先ほどの殴り方といい、なかなか容赦がない少年だ。

だが、今はそれが心地よいとさえ思う。先ほどまで掴んでいた懐刀の肉をえぐる感触、血の滴り落ちる音、錆くさいにおい。それが自分の血と踏みつけられる手の痛みで上書きされるのなら、喜んで差し出そう。

あの男に襲いかかったことに後悔はない。ただ、総一郎を傷つけてしまったことには、自然と涙があふれてきた。

（なぜ邪魔をした？）

憎々しげに見下ろす少年をぼんやりとみていると、複数の足音が近づいてきた。

「健たける、私刑リンチとはいささか趣味が悪いぞ」

咲耶姫が赤城あかぎと青柳あおやぎ、そして見慣れない和服の女性を連れて歩い

てきた。中世の貴族女性を思わせる長くゆったりとした髪を、和紙でひとまとめにしている。女性は目を潤ませ、じつと健と呼ばれた少年を見ている。

「胎教にも悪かるう」

咲耶姫が、少女とは思えぬ低い声で言った。

「知っていたのか？」

冗談めいた口調で健が言う。

「馬鹿にするでない。あにぎみの様子を見れば、一目瞭然だろっ」
「そうですかい」

健は遊子の手を踏みつけていた足をどけると、和装の女性のもとへと近づく。女性が大きいのか、それとも健が小さいのか、二人の体格はほとんどかわりなかった。

咲耶姫の弟かと思いきや、兄だったとは。しかも、妻帯者ときたものか。敬称は皇子^{みこ}とでもつければよいか。

血と涙で汚れた顔を歪めると、咲耶姫と目があつた。

咲耶姫は、いつもの皮肉めいた笑みはなく、無表情のまま遊子を見下ろしていた。

「聞きたいことが多すぎる。居間まで来い」

言い放つと赤城を連れて出て行った。

青柳だけはつぶらな瞳に戸惑いをのせながら、遊子を檻からだしてくれた。ハンカチではなくスポーツタオルを差し出してくれたのは、彼らしかった。

アンティーク家具で揃えられた豪華な居間には、咲耶姫と赤城、健皇子とそれに付き添う女性、それに左手と脇腹に包帯のまかれた総一郎がソファに座っていた。

総一郎の顔色は悪かったが、命に別状はないらしい。親指で、自分の隣を指さす。ここに座れということらしい。

咲耶姫も首を縦に振るので、遊子は総一郎の隣に座る。

遊子の両手にはまだ、手錠がかかったままで、顔だけは青柳が不器用ながら拭いてくれたので多少まともになっている。多少、青あざができているのに気付いたのか、総一郎は苦虫を潰した顔をした。猫脚テーブルの上から、紅茶と香ばしいクッキーの香りが漂ってきたが、誰もそれに手をつけていない。そんな気分にはなれそうにない。

健皇子が口を開こうとすると、咲耶姫は右手でそれを制した。わかったといわんばかりに、健皇子は両手を広げて見せる。

「どういうことだ？意味もなく襲い掛かるわけでなかるう。妾にはわからぬが、木月^{きづき}だけでなく、赤城や青柳も妙な顔をしているので

な」

姫は歪な笑みを浮かべていたが、いつもほど余裕はなかった。問
いかけるといふより、尋問に近い。

赤城や青柳のほうを見ると、口に出しにくいようなもごもごとし
た顔をしている。

（ぼんやりと見えていたのか）

まったく見ることでできない咲耶姫には、あの男に重なるなにか
などわからないのだろう。

隣同士に座った遊子と総一郎は、珍しく顔を見合わせ、思いを合
わせるように頷いた。

遊子はカードケース、総一郎は手帳を取り出した。それぞれに入
っていた写真は同じものだった。

擦り切れたフィルム写真には、二人の少年が映っていた。ひとり
は狐のような相貌に見覚えがあり、もうひとりは遊子によく似てい
た。

咲耶姫と健皇子の顔に動揺が走る。

見慣れたものに、片方の少年はよく似ていた。

「十六年前の写真です」

写真の日付をさす。

「一人は俺で、もう一人は遊子の兄にあたり、真人といいます」
「おかしいだろ、資料には何も書かれていなかったではないか」

咲耶姫は首を傾げる。赤城はいつのまにか取り出した資料を姫に渡していた。

今更ながら、個人情報ばダダ漏れである。

「『兄』は私が生まれて数日後に鬼籍に入っています」

『兄』という言葉に妙な感覚をもちながら遊子はいった。

皇族に戸籍がないように、十華族にもかかった特例がある。男児の届け出は十までに行えばよいとのこと。低いながらも皇位継承権が与えられる血筋なので、時に東皇家へと養子に出される場合があるためだ。

なるほど、と咲耶姫が頷く。書類上、いないのであればいないのだ。情報などそのようなものだ。

「死んだのか」

「公式には」

歯切れの悪い言い方に咲耶姫は、唇を尖らせる。

「率直に言え」

「死体は見つかっていません。見つかったのは左肘から先でした」

川の氾濫で流されて、見つかったのは腕だけだったということになっている。

左肘という言葉に、健皇子が眉をあげたのを遊子は見逃さなかった。

「なにをいうか、兄上は……」

「兄貴は義手だよ」

ぶつきらぼくに健皇子が言った。まずそうにクッキーを咀嚼そしゃくしている。

「オメーが知らないだけだ。俺も、忘れちまうくらい違和感ない動きするけどな」

「ごく一部しか知らないはずの腕の話を知っていたことで、健皇子は不機嫌そうである。」

「じゃあ、兄上は東雲真人だということか？」

咲耶が首を傾げる。信じられない面持ちで、答えを待っている。

いや、本当は答えなど聞きたくないのかもしれないのかもしれない。

困惑と憤りが彼女の声をかすれさせていた。

（姫は知らなかった）

遊子は以前、左腕のない二十代の男性について咲耶姫に聞いていた。表情のとおりまったく知らなかったのだろう。

「いえ、それも正しくありません」

「率直に言え」

苛立たしげに姫が言った。

「あれの中身は、少なくとも真人ではないからです」

言葉を選ぶように総一郎が言った。ちらちらと、遊子のほつを見る。

「真人は神隠しに遭い、中身が変わってしまいました。あれは人間ではありません。生ける屍です」

「なにかの冗談か？」

唸るような低い声は、到底、ビスクドールの姫から出ているとは思えなかった。

「その根拠はあるのか？推測なぞ聞きたくない」

いつものおどけた雰囲気とは全く違った姫は、大の男でもひるませる迫力を持っていた。

遊子は大きく息を吐いた。

「総一郎、隠すことはない」
「遊子！！」

総一郎を片手で制し、遊子は真実を語った。

「あれは、私の身体だったからです」

信じられないことをいう。
皆が皆、遊子を見る。

「私は東雲真人だったのです」

遊子の発言に総一郎は拳でテーブルを叩いた。傷口に響いたらし

く、顔をゆがめる。

咲耶姫はおろか赤城、青柳も目を見開いていた。

「取り換え子なんです、私は」

肉体を奪われ、幾度も冥府に連れて行かれそうになった。

「自分の身体を奪われた私は、現世にとどまったまま」

遊子は自分の腹をゆっくり押さえた。

「母の胎に戻り、東雲遊子となりました」

総一郎は拳を強く握り過ぎて、血がにじんでいた。左手も包帯に血がにじんでいる。

「私は、妹の身体を奪い、今を生きているんです」

青あざを残した醜い顔に笑みが浮かんでいる。
胸のつかえがとれた気がした。

○
●
○

「おまえが遊子のこと、隠したがっていたのはそういうことか」
「さあ、どうでしょうね」

総一郎だけ部屋に残されていた。にじんだ包帯は替えられ、鎮痛

剤を飲まされた。遊子はじつと総一郎を見ていたが、かける言葉が見つからず促されるまま退室した。

別に気にしなくてもいいと総一郎は思う。自分が好きでやったことなのだから。

あのまま、遊子を放置していたら、きっと遊子だけでなく東雲の家にも波紋が広がる大問題になっていたはずだ。

今も問題であるのに違いなが、現在、葛城かつらぎと名乗る皇子はおおやけにせず、咲耶姫に処分をまかせている。どういう意図があるのだろうか。

咲耶姫は、赤城と青柳からも話を聞いているようだ。ぼんやりとただよう何かを感じたのだろう。

総一郎がいち早く反応できたのも、遊子の目的を知っていたことと、葛城皇子に二重に浮かぶ別のものが浮かんで見えたことによる。

だいぶ落ち着いたものの姫の怒りはびくびく動くこめかみに残っていた。

「祭妃の資格がある母に、東皇の流れを汲む父か。そこに生まれた男児なら、憑代にこれ以上はない」

調査ミスだ、と咲耶姫は爪を噛んだ。

「一方的に怒るのは筋違いだろうな。大本の原因はこちら側にある」

病弱な長兄を見るのは、年に数度ほどだった。もう一人の兄弟は頻繁に顔を合わせているのに。

「十六年前、大きな祈禱を行った記録があった」

「葛城皇子のためですか」

「おそらくな。病の祈禱か、それとも怪しげな呪術をおこなったかは定かではない」

幼少時の皇族の記録は大きく扱われない慣習のため、詳しく調べられない。

「なにかしらの縁で兄は真人に乗り移った。それとも、最初からそのつもりで」

「それ以上は言わないでください」

湧き上がる感情を抑える総一郎がいる。総一郎とて悔しいのだ、まさか自分の幼馴染を奪ったのが目の前の姫の実兄であるとは。

「兄上をどうしたいのか？」

「あおっていますか？」

遊子の言葉を借りれば、生ける屍だ。早く現世から常世へとうつるべきである。

一方で、肉体は東雲の長子たる真人の身体である。

「あのまま、何も起こらなければ、遊子はどうなってたんでしょうね」

真人は真人として、遊子は真人の妹として生まれ、その精神はまったく別のものなのだろう。

きっと、総一郎は母に頼まれて、遊子の面倒を見ることになったに違いない。

そして、三つを過ぎても「わたしは真人なんだ」と、いうことはなかっただろう。

「子供の世迷いごとだと思わなかったのか？遊子のことは」

「ともだちだったんですよ。真人は」

小さな遊子の身体には、いつも奇妙なものがついていて。迷ひ神のようでそうでないようなもの。

それは、遊子が年を重ねるごとに、遊子の身体に吸い込まれていった。まるで、異物を長い年月をかけて同化していったかのような

それが完全になくなったとき、遊子のはじめて『真人』としての思い出を語りだした。

最初、遊子が真人だと喋ったとき、信じられないのと同時に、この上なく嬉しかった。小さな遊子を思い出の場所に連れてっては、昔と同じように遊んだ。

それは、いつまでも続くものではなかったのだが。

「複雑なことはこの上ないですけど」

だから、遊子から離れなければならなかった。問題は本人がそのことにまったく気が付かないことだった。

五つだった幼い記憶よりも、それからの遊子と過ごした時間のほうがずっと長かったのだ。昔の真人として扱うには、成長を追うことに無理がでてきた。

「難儀な奴だな」

「そつかもしれません」

総一郎は、皮肉な笑いを見せた。
咲耶姫も、つられるように笑う。

「おまえが、こちらに来たのは五年前だったな」

「そうですね」

「そのとき、おまえは十六で、遊子^{ゆうこ}は十一だったっけ」

総一郎は、咲耶姫の確認するような言葉に、背筋が凍る思いをした。

咲耶姫は、小刻みに頷きながら、じっと総一郎を見ている。
冷や汗が背筋を流れる。

「このロリコンめが！」

と、悪魔のような笑いを浮かべ、咲耶姫は言ってくれた。

総一郎は、場に流されてとんでもないことを口走ってしまっていたことに、今頃気づくのだった。

十四 負

さつさと卒業したい。

そんなことを思うようになったのは、この学園に通い始めて一週間もたたない頃だった。

誰も、自分を見てくれない。

地元の名家の娘として、皆から気づかれて育ってきたというのに、ここにはそれをしてくれるひとが誰もいない。

皆、どこかしらよい家柄の出身で、自分の家などたかだか田舎の土地持ちに過ぎないことがわかった。

家柄が良いほど幼いころよりこの学園に通っているらしく、特待制度でねじ込まれた自分とは雰囲気から違った。

優しげに学園内を案内するクラスメイトが、自分のことを薄ら笑っているように見えて仕方なかった。

なんでこんな学園に入ってしまったのだろう。

なにも知らず、井の中の蛙でいたほうが幸せだった。

さみしい、つまらない、腹が立つ、不愉快だ。

ネガティブな思考が頭の中でぐるぐるとまわり、気が付けば自分よりも下にいる生き物を探すようになっていた。

ほんの少しの優越感と嗜虐心（ぜきじやくしん）を満たすために、一般入試組と呼ばれる生徒を見下していた。

それだけでなく、同じ特待組の生徒の中でも、明らかに自分より

も家柄の悪い子をグループに引き入れるようにした。

そうしなければやっていけなかった。

それが正しいことでないことくらいわかっていた。

いつか自分にもふりかかることをしていると思っている。

このところ、身体がだるくて重い。

なにかが、自分の背中の中のしかかり、身体を押しつぶそうとしているようだ。

目がくらくらして、耳鳴りがひどい。

とても気持ち悪くて、食事も入らない。

話しかける級友の声がうるさくて、頭に響く。愛想笑いを返すのも億劫だ。おっくう

まったくわからない数学の授業を抜け出し、保健室で時間を潰す。六つあるベッドの半分は、自分と同じような理由で時間を潰しているものがある。隠す様子もない携帯端末をいじるさまを保健医は素知らぬ顔をして見逃している。

このまま次の授業もさぼろう。

昼食を終えた五時間目は睡魔を呼ぶ。最近、疲れやすい身体はベッドに横たわるとすぐに眠りにつくことができた。

目が覚めると外は赤く色づいていた。
とくに下校時間は過ぎていているらしい。

重たい身体をゆっくり起こすと、さっさと帰れと言わんばかりの保健医と目が合う。

保健室と一緒に出ると施錠をし、さつさと職員室に戻っていった。

教室に戻らなくては。

薄暗い学校の廊下は、昼間とはうつてかわった雰囲気である。かつかつと上履きの音が反響する。まだ生ぬるい空気がじつとりと気持ち悪い汗をかかせる。

早く帰りたい。

反響する足音と外から聞こえてくるヒグラシの声が耳に響き、自然と速足になる。

なんだかとても嫌な気分で、早く学校から離れたかった。

何者かにじつと見られている気がして、自意識過剰とも思えなくて、階段を上る。

『なんでそんなに急いでいるんだい？』

エコーがかかったような男の声が聞こえた。
優しい声につられてふと振り返った。

○
●
○

なんでうまくいかないの。

シャーレの寒天培地に目を細めた。あきらかに違う菌が繁殖している。菌の植え付けの際に雑菌が混入したようだ。

これでは、最初からやり直しである。

なんでもない簡単な作業にこれで何度失敗しただろうか。
自分はちゃんと両手を消毒して作業をしていたというのに。

器具を汚い手で触った馬鹿がいる。

きっと、最近研究室にはいつてきた二年生だ。白衣もつけず、実験室に菓子を持ってくる。

それらしい学習もせず、ただ空いたコマの暇つぶしにやってくる。

教授はなにもいわない。

わかっている、この学園の生徒のほとんどがなにかしら後ろに権力を持った生徒なのだから。

なにも勉強しなくても、これといった特技がなくとも、御家柄というひとつの生まれ持った幸運さえあれば、就職活動などという精神鍛錬をしなくてもいいのだ。

自分もそのひとりに戻ろうと思えばできるというのに。

しかし、それを受け入れた際に残るのは、縁戚関係を結ぶための結婚しかない。

年齢や相手の趣味、好みなど関係なく、家に必要な歯車として用意される。

高等部を卒業し、大学部に入るとき母に言われた言葉。

「付き合っている人はいるの？」

それをそのままの意味で受け止めなければよかった。

笑いながら、彼の名前を言ったのが間違いだった。

同じ大学部に入学するはずの青年はそこにはいなかった。電話もメールもつながらず、一度だけ来た年賀状の住所を頼りに彼の実家に向かうと、『売家』と書かれた看板がかかっていた。

母に詰め寄ると、母はにこやかな顔をして、彼との関係の深さを聞いてきた。場合によっては、手術しないとイケないからと、冷たく言う母に、最初、まったく意味が分からなかった。

その後、行きつけの病院の産婦人科医が健康診断と称した行為によって母が何を言いたかったのかわかった。

ここ三年、実家には帰っていない。
卒業しても戻る気はない。

実家からの金で生活しているというのも気持ちが悪いので、バイトをして生活費にあてがう。

二十歳になり、寮を引き払い、一般入試組向けの安い下宿先を探した。

今までの崩壊した金銭感覚をあらため、家に頼らずに生きていくと決意した。

なのに卒論の実験は上手くいかず、就職活動もままならない。

実家が口を出しているのか、それとも純粹に自分の力不足なのかわからない。ただ、合格通知が家のポストに入ることにはなかった。

やってられない。

腐敗したシャーレを流し場に置くと、椅子に座り外を見る。

汚れたガラス窓越しに見る風景は、やはりそれなりの風景で、それでも薄紫色になった空は透明水彩をにじませたような色だった。

誰かここから連れ出してくれないかな。

甘えた思春期の少女のような考えが頭に浮かんでしまい、つい苦笑してしまう。

そんな都合のよい話があるわけない。

『どこかへ行きたいのかい？』

もしかして、口に出してしまったのだろうか。
はずかしいと顔を赤らめながら、振り返った。

○●○

これであいつらを見返せるだろうか。

らせん階段を上り、屋上へと向かう。

靴音が耳に響く。

手には何度も書き直した封筒を握りしめていた。

あいつらの名前を書き連ねている。コピーは二部取っており、両親と学校に後日郵送されるだろう。

腹部をおさえる。

昨日殴られた脇腹が痛い。わざわざこの季節にランニングかと思

いきや、裏山で暴行とは暇人だ。教師に見つからないように、顔や手は避けてくれる。

人間サンドバッグだと笑いながら言っていた。

人通りの少ないところを選ぶのはわかるが、獣道に近い山の中でおこなうなんて。

この学園は、出資者が大層な権力者らしく、校内ではどんなに隠れて暴力行為を行おうともすぐに教師が駆けつけてくれる。まるで監視されているかのようだ。

三回ほど注意されたところで、場所をかえることを学習したらしい。

なにかと呼び出されては、殴る蹴るの暴行である。

それだけならまだよかった。にやにやと笑いながら、カメラをまわす奴らはどうしようもない下衆の面をしていた。

これがばれたら、自分たちもどうしようもない立場にさらされるということがわかっていくのだろうか。

それとも、全部親の権力でねじ伏せるのだろうか。

なぜ暴行するのかと聞くのは不毛なことだ。

生態系のより下のを虐げるのは、彼らの趣味である。

せつかく親父たちは喜んでくれたのに。

難関というこの学園に入学できて両親は両手をあげて喜んでくれた。ひとり暮らしになり負担がかかるというのに、気にするなと肩を叩かれた。

遅れをとらないように頑張らないと、と入学してみれば、進学校

とは名ばかりだった。

人を見下すことしか考えない奴らに自分は体のいい玩具にされた。

「ごめんな、と言いながら屋上の柵をまた越す。上履きをきれいに並べ、その下に風で飛ばないように手紙を置く。」

古典的でなんのひねりもない、一矢報いる方法がこれくらいしか思いつかないなんて、それほど自分は賢くないものだと思った。

この高さで、下はコンクリート。

自分の頭がトマトになるさまを想像してしまう。

駄目だ、と頭を振っても狭い足場の上に立つ身体は震えてしまう。

生ぬるい九月の風が、べたべたとした気持ち悪い汗をかかせる。

楽になろう。

汗まみれの手のひらで掴んだ手すりをゆっくり放そうとしたとき。

『このまま、落ちていくのかい？』

若い男の声がした。

驚いて手すりを持ち直し、ゆっくりと後ろに振りかえった。

「どういうことなのだ」

咲耶さくやは、声が荒ぶるのを必死に押さえながら受話器を握りしめる。業務事項しか答えない電話の主は、目上のはずの咲耶を無視して受話器を下ろした。

「……姫」

赤城が心配そうにこちらを見つめている。

普段にやけたおどけ者がこのような顔を見ると、どうにも気分が悪い。

そこで、さらに眉間にしわが寄るような報告をせねばならないとなると、気が重い。

「兄君は屋敷には帰っておらぬらしい」

「それは」

葛城かつらぎは、都内に構える屋敷に戻っていない。昨日、九月一日から。

「母上のもとに行っているという」

自分でも顔が強張っているのがわかった。母の言った言葉など、どこまで本当かわからない。

できそこないの自分や役立たずの健たけるはともかく、兄のためならばどんな嘘でもつきとおすだろう。

同じ父、同じ母を持つとはいえ、三兄弟の立場の違いは母の子どもに対する扱いからわかった。

できそこない、生涯ともに子を孕むことのできない身体を母はこう称す。

父は政治的には冷酷な性格をした男で、人間として尊敬できるいきものではない。ただ、複数の女性を妻にむかえることを否としたところは、世の女性としては理想とされる夫だろうか。

それは一般人の立場からであり、世継ぎを深く希望される東皇の血筋を考えれば愚かとしかしいようがなかった。

母が輿入れして九年間、まったく懐妊がなかったからだ。

十年目にしてようやく兄を生むまでにどれだけ苦労があったのかわからない。ただ、その後、数年おきに生まれたわが子を、『役立たず』『できそこない』と称する人間ではなかったと、古くから仕える屋敷の人間が教えてくれた。

真人まひとを乗っ取った経緯いきさつに、母が手を出している可能性は高かった。そうであれば、真人の身体で葛城として生きてきたことに説明がつく。

咲耶はモニター越しに父を見ることは多いが、それは一方的なものであり、実際顔を合わせることとは一年に一度もない。

皇族の子は、親と隔離されて育てられる。成人まで、表舞台にでないようにするための配慮だ。

父が兄のことを知らなくても、不思議はなかった。

からんと、涼しい音がすると思えば、アイスティーが置かれてい

た。ミルクがそばに添えられている。水出しのダージリンだ。

ダージリンにミルクを注ぐなど邪道という輩もいるが、咲耶はこれが好きだった。

「砂糖はいくつ入れた？」

「シロップを少々」

甘い笑顔を浮かべ、赤城が答える。

九つのときから仕えるこの男は、咲耶の好みを知り尽くしていた。

咲耶はミルクをそそぐと、渦巻いて濁っていく液体を眺めた。

「遊子^{ゆうし}はどうしている？」

「だいぶ落ち着いたようです。でも、自分から部屋に出る気配はありません。ただ、木月^{きつき}のことでどうすればよいのか、わからないでいるようです」

遊子には、学校を休み、屋敷にとどまってもらうようにしていた。木月を刺したことに深く動揺していたからだ。葛城のことを忘れるくらい、彼女には衝撃が大きかったことだろう。

「彼女、と呼んでいいものかな？」

ほんのりと甘いアイステイーを口に含みながら、咲耶は問いかけるようにつぶやいた。

七年間、真人として、十六年間、遊子として生きてきた。少女としての年月のほうが長いが、遊子の思考は少年より思えなくもない。

これは笑えてくるな、とロリコン三白眼を思い出す。

元を知っているだけに、無理強いなどできようにもないだろう。まあ、使用人の息子という立場もあるだろうが。

頭の痛いことばかりを考えていただけに、降ってわいた楽しいげなことに心が躍ってしまう。

赤城のやれやれという表情に、にやけた顔を可愛らしい笑みに戻す。

「木月のもとに、あとで連れて行ってやってくれ」

「わかりました」

「その前に……」

飲み干したグラスをテーブルに置くと、咲耶は両手を広げた。

「抱っこ」

「いつになく甘えん坊ですね」

身長差が三十センチ以上、体重も倍ほど違う。咲耶は軽々と持ち上げられ、その名の通りお姫様抱っこをされた。

「どちらまで行きましょうか、お姫様」

「眠りたい」

「だめです。お風呂に入ってからにしてください」

優しい声で、乳母のようなことをいう。

「では、入れてくれ」

「ええ、ふたりきりのときになら」

屋敷に使用人がいない日はない。遠回しな拒絶に、咲耶は首に巻いた両手をきゅっとしめる。

赤城は少しだけ苦しそうな顔をしたが、鍛えられた身体に非力な咲耶の腕力は意味をなさなかった。

ちゃらんばらんに見えて場をわきまえている男だ。

東京都学園自治区は広く監視されている。その中に、咲耶や赤城もまた含まれている。

迷い子を作らぬように、あつすぎるおくるみにつつまれた学園。

厄介ごとをひとまとめにすることで、迷い子の数は減った。減ったが、なくならない。

なんの力もない、できそこないの自分を齒がゆく思いながら、咲耶は赤城の肩に額を付けた。

くぐもるような声が漏れるが、赤城は聞かなかったことにしてくれるだろう。

嗚咽おえつという名の心の弱さは、姫たる自分にはふさわしくなかった。ずるいと思いつつ、従順な青年になすりつける。

赤城は十メートルもないバスルームまでの道のりをゆっくりゆっくりと歩いてくれた。

十五 総一郎

「どうする？　俺も一緒にいようか？」

赤城^{あかぎ}は遊子^{ゆうす}を心配そうに見ている。遊子は首を振ると、部屋をノックした。

客間には女中がおり、奥のベッドには総一郎^{そういちろう}が横たわっていた。部屋は快適な温度に保たれているのに、総一郎は眉間にしわをよせ、寝汗をかいていた。傷口が熱を持っているのだろうか。

「飲み物を用意しますので」

女中が退室する。とってつけた用事は、気を利かせてくれたのだろう。

用意された椅子に座り、夢見の悪い青年の顔を見る。

なんといえいいのかわからないまま、一日が過ぎてしまった。自分がここにいてよいのかもわからない。目障りな顔を見せる前に退室したほうがよいだろうか。

「ありがとう」

遊子は、謝罪ではなく、礼を告げた。

自分を助けるためにやったことだとすれば、こちらのほうがふさわしいと思ったからだ。

椅子から立ち上がり、背を向けると、手首をぎゅっとつかまれた。

「そんだけか？」

不機嫌な青年は、いつもより悪い目つきをこちらに向けている。

「他になんといえればいい？」

遊子は眉根を寄せて答える。

総一郎は呆れたようにため息をついた。

「別に気にすることない。皮が少し切れたただけだ。内臓に傷はない」

「その割に顔色は悪いぞ」

「気のせいだろ」

「目つきも悪いぞ」

「生まれつきだ」

遊子が顔を少しほころばせると、総一郎はつかんでいた手をようやくはなしてくれた。

遊子は椅子に座りなおすと、じっと総一郎を見る。

「なあ、あのまま、おまえが止めなかったらどうなっていた？」

「一般的に考えると、殺人もしくは殺人未遂だな。しかも、相手はVIPだ。お館様がたまただじゃすまない」

一応、今の状況も殺人未遂にあたるのだが、周りが何も証言せず総一郎が被害届をださなければもみ消すことは可能である。総一郎にその意思がないことは明白だが、葛城^{かつらぎ}の出方が不可解で仕方ない。咲耶^{さくや}姫の手前、処理をまかせているということだろうか。

「あれは、やはり人間なのか」

遊子はうつろな目を総一郎に向ける。

「ごく一般常識に当てはめればな」

人間の姿をした人間。その中に入っているものも同じく人間の姿をしていた。ただ、器と中身が食い違い、歪いびつにぶれていた。

遊子は自分の手のひらを見る。かつて、自分も同じような姿をしていた。いつも、幼い遊子を俯瞰ふかんするように浮かんでいた。それが、年月とともに同化していった。赤子として笑っていた自分と、それを眺めていた自分。前者が本当の遊子であつたとすれば、今の自分は真人まひとが遊子の身体を乗っ取った姿ということになるのではないだろうか。

「ごく一般ならば、か」

「ああ」

その常識を素直に飲み込めたら、今の自分はよほど楽なのだろう。なまじ、真人としての記憶を持っているから、今の苦しみがあるのだから。

「深く考えなくていい。奥様もおふくろも言っただろう」

あんなに冷たかつた総一郎が、今は駄々っ子を言いくるめるように話すのがおかしかった。遊子としては、自分のほうが年上だと思っっているのに。

わかつている、わかつているが。

それは、同時に真人としての存在を否定されたかのようで、受け止められなかった。

自分の身体を奪ったあの男が憎くて憎くてしかたがない。

「私はおそらく、あの男の前で平静ではいられない」

この世にあつてはならないものを冥府へと突き落とすために何でもするだろう。遊子として生まれてこのかた、そのことを考えていたのだから。

それが、今の自分の存在を否定することを意味していても。

「なら、俺が止めてやる」

それがいつもの役目だから仕方ないと、総一郎はそっぽを向いた。

遊子は唇を歪めると、そつとうつむいた。

「面倒ばかりかけて悪いな」

せつかく、自分から逃げてこの学園に来たというのに。

せめてお返しにと、なにかできることはないかと、

「たいしたことじゃないが……」

私がおまえにできることなら、なんでもやってやる、と伝えたと、総一郎は細い目を見開き、じつとこちらを見る。

（やはり迷惑だったか？）

遊子にできることなどたかが知れている。いらぬものなのだろう。遊子がしゅんとなると、総一郎は慌てて何かを言いかけようとしたが、ナイトテーブルに置いた携帯電話が鳴った。

『おい、木月^{きつき}、遊子^{ゆうし}もいるか？』
「……はい」

総一郎がなぜかふてくされた顔で出る。

青年のようなハスキーな声の主は、咲耶姫だった。声が大きい、遊子の耳にも届いた。

『今すぐ広間に来い』

ただならぬ様子で、着信を切られた。総一郎は目を伏せると、脇腹をおさえてベッドから立ち上がった。

「久しぶりだな」
「……お久しぶりです」

遊子は真っ白な髪に長い髭をたくわえた老人を見た。深く刻まれたしわには苦勞がうかがえるが、背は曲がる様子もなく、空気を重くさせる威圧感を持っていた。

身内でもけっして甘さを見せない、それが祖父、孝人^{たかひと}だった。

咲耶姫の様子から、もう話はされているのだろ。姫はなにやら考え込んだ顔をしている。

「健^{たけ}さまから話を聞いている。さぞや、迷惑をかけたようだな。うちに帰るぞ」

「……」

（なるほど）

葛城と咲耶姫が黙っていても、事情を知る者はもうひとりいたのだった。

遊子を外聞にださず処罰するには、これが一番妥当だろう。

どのように説明したのかはわからないが、東皇の血筋に言われては祖父も動かざるをえない。

たとえ、どんな理由があろうとも、健皇子には葛城は兄なのだろう。葛城が、肉体の上では他人だとわかっているというのに。でなければこんな真似はすまい。

「おまちください、孝人さま」

遊子の手を掴む祖父を総一郎が止める。父に家督を譲ってから、父を『お館さま』とよび、祖父を名前で呼ぶようになった。

「その件につきましては……」

「使用人の連れ子が、口をはさむな」

遊子は頭がかったなり、祖父の手を振りほどこうとしたが、総一

郎が左手を添えて制した。

遊子は唇を噛みながら、震える拳をおさえた。

いつもそうだ。

祖父は、自分を道具のようにしか考えず、総一郎を使用人の子として切り捨てる。

祖父は父を甘い人間だというが、反対だ。祖父があまりに冷たすぎるのだ。

家に対して、経営に対して責任のある立場だとわかっている。甘く見られては、誰につけこまれるかわからない。それによって、何千、何万という人間が露頭に迷う可能性もはらんでいることも。

遊子は、反抗的な目を見せないように瞼を強く閉じる。

祖父は表情の见えない鋭い目を遊子に向けていることだろう。

総一郎は、口を閉じたが引く様子はなく、遊子と祖父の間に立っている。

「随分と生意気になったものだな」

「……、申し訳ありません。口が過ぎました」

総一郎は、一步下がる。

遊子と同じく吐き出したい感情を必死に押し込めているようだった。

遊子以上に総一郎の立場は狭い。

「東雲の翁よ」
おきな

今まで黙っていた咲耶姫が口をだす。言い方はかえているが、つまりは『じじい』呼ばわりである。

豪胆な姫の言葉に、遊子や総一郎だけでなく、赤城も青ざめている。ただ、青柳^{あおやなぎ}だけは、言葉の意味を理解できないらしく首を傾げている。心底、このくまさんのような男を遊子はうらやましいと思った。

「いまは東雲の娘は、妾の預かりとなっている。いきなり来て、承諾なしに連れて行くのはどうかと思うぞ。身内だから面会を許したのだが」

おもむろに書面を見せる。以前、咲耶姫とかわした契約書だった。仕事内容は大変うさんくさいものだが、契約自体は成立している。

祖父は一瞥^{いちへつ}すると、鼻を鳴らす。

「未成年者を保護者が引き取ることにどこが無礼といえますかな」

至極まともなことをいう。咲耶姫も、言い返す言葉がないだろう。

しかし、咲耶姫は落ち着いたもので、ならば、とちらりと総一郎を見る。

「わかりました。しかし、こちらとしても簡単に引き下がるわけにはいきません」

「なにか条件でも」

「ええ。木月と一緒に連れて行ってもらえませぬか」

咲耶姫はちらりといつもの底意地の悪い笑みを見せた。

祖父は一瞬、顔を曇らせたが、本家の姫をないがしろにするわけでもなく頷いた。

遊子は、咲耶姫の思惑になにか疑問を持ちながらも、祖父に従うことにした。

○●○

「思い違いだとよかったんだが」

遊子が去ったあと、咲耶は大きなモニターを前に苦笑いを浮かべた。東雲の爺が来る前にも見たが、もう一度確かめるように眺める。それは、昨日から今日にかけて起きた事件現場の映像だった。

そこにいた人間が、何かに吸い込まれるように消えた。到底、常識では考えられないことが起きていた。

学園内で三名、その場面にいたと思われる所在不明者がでていた。

学園内のモニターには、一人の男がうつっていた。痩身の青年、切れ長の涼しいまなざしをした男だった。

昨日、遊子が襲い掛かった葛城である。

食い入るように画面を見てもなにもわからない。映像越しではみえるものも歪んで見えるという。

どちらにしても、見鬼の才の欠片もない咲耶にはわからないもの

だろう。

映像を切り替えると、色で区切られた温度分布図に異質のものがうつっていた。信じたくないとはいえ、現実を受け止められない咲耶ではなかった。

「生ける屍か」

深く爪を噛む咲耶。

歯がゆくてしかたないが、そこに兄と呼ぶものを心配する自分がいないことに気が付いて驚いた。不思議なほど冷静だった。

上の健ほど頻繁に会わず、母の愛情を一身に受ける兄を嫉妬しているのではないかと気づいて首を振った。

それでは、できそこないだけでなく、どうしようもなく醜いいきものになってしまう。

いや、いつそそうなってしまうたほうが楽だろうか。

健は咲耶とはちがった感情を葛城に持っているのだろう。

だからこそ、遊子を東雲の爺に引き渡す真似をしたのだから。

それは、逆に咲耶としても都合がよかった。

咲耶に今の葛城をどうにかする方法は、一つしか思いつかなかった。

兄と呼んでいたものが、そんなものだとかわかっていてそれをどうすることもできない。

咲耶に力はない。

西のもののように見えざるものを見る力も、それを打ち倒す力も。

東のものが化け物を打ち倒すには条件が必要である。
それを行うための道具さえあれば、誰よりも化け物どもの天敵となる存在になる。

迷ひ神をまったく感知できない東皇の男子は、かわりにある特性を持っている。完全に物理化しない限り、迷ひ神は東皇の血筋のものをまったく傷つけることができないのだ。

真人^{まひと}の場合、西皇の血が混じったことで、迷ひ神は見えないが干渉されるという貧乏くじを引いた体質となってしまうたが。

つまり、そこに迷ひ神を見ることが出来る道具を手に入れば、言うまでもないだろう。

無能者が東皇たる所以^{ゆえん}である。

東皇家には、宝刀といわれる見えざるものを見せ、それを斬る刀がある。咲耶にはさわることもできない代物である。

現在は、伯父が所有しており、簡単に借りることはできないだろう。

ましてや、世継ぎたる葛城を斬るためとなると。

それに及ばずとも準ずる代物があることを咲耶は知っていた。

宝刀が幾つか打たれたうちの真打であり、その兄弟刀があることを。

その中で、近代まで所在がわかっていたが、のちに不明になっているものがあつた。

臣籍降下され、『東雲』の家ができたところである。

ひとつの賭けだ。

総一郎がうまく立ち回ってくれるとよいが。

兄を倒すことに、思考をめぐらす自分が何とも醜い生き物に違いないと、嗜虐的な笑みを浮かべた。

父に知らせれば、どのような行動に移すのか理解できる。その手間を省くために、咲耶がいるのだ。

母にまた嫌われてしまうな、と。

「姫は正しいですよ」

赤城が心を読んだかのような言葉をかけるのがおかしかった。差し出されたミルクティーを口に含んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6794z/>

マヨイマヨイガ

2012年1月13日00時59分発行